

ホントにゼロ からの 簿記 3 級

電卓
いらず！

主要論点の理解と
全体像の把握を 3時間で！

借方って左右どっち??
の覚え方も収録！
インプットした内容は
章末問題で即確認！

ふくしま
まさゆき

ホントにゼロからの簿記3級

電卓いらず！

まずはスマホ・タブレットだけで簿記を始めましょう！

簿記検定試験用のテキストを読む前に、まずは本書で全体像を把握しましょう！
3時間程度で読めると思います。

簿記は、どうしても“決算”を見据えて勉強しなければなりません。本格的に簿記検定の勉強を始める前に全体像を知っておいた方が、結果として理解が早いと思います。

そして全体像を把握する際には

- ・最初から“初学者が陥りやすい穴”を埋めておけば理解が早い！
- ・最初から“そもそも論”を知っておけば理解が深まる！
- ・最初から“取引の仕組み”を知っておけば、しっかりわかる！
- ・そして経理実務の話も盛り込む！

これが本書のコンセプトです。

もちろん、やりなおしのヒト也大歓迎です！

はじめに

まずなによりも、本書に興味を持っていただきましたことに心より感謝申し上げます。
怪しいくらい安い販売価格に、センスのない表紙デザイン。
「きっと大した内容ではないのでは、、、」と感じたことと思います。

表紙デザインに関してはもちろん私自身にセンスがないことが原因ですが(笑)、少なくとも販売価格に関しては、表紙も文章も挿入した図表もタイトル名も、**100%**私一人で考え作成したことによるものです。プロのライター・イラストレーターさんやプロ仕様のソフトウェアに一切頼らずに、自宅にあるごく普通のパソコンで、すでに入っているソフトウェアだけで作成してあります。そのため、製作費はほとんどかかっていませんので、安い販売価格に設定させていただきました。

ただし、内容に関しては、私のこれまでの豊富な経験がギュッと詰まっていますのでご安心ください！

本書は「簿記の知識がゼロの人」が対象です。簿記の知識が「ホントにゼロ」の人が日商簿記3級の勉強をする前に、『これを知っておくと、簿記3級をすんなり理解できる』のではないかと、いうものです。
簿記のことだけでなく、いろんな取引の“仕組み”から説明しています。

私は様々な方に簿記の入門や簿記3級などを教えてきました。
その際『市販のテキストならなんでもいいよ』と言っています。なぜなら、わかりづらい箇所やおかしい点があっても私がその場で訂正・補足するからです。
『自分だったらこう教える』というものがあるからです。

そうであれば、そのノウハウを本にしてしまおう！

ということで、本書を作成しました。
(本書を読んだあとも、他の市販のテキストなどを読んで簿記の勉強を続けていってください！)

本書は、範囲も簿記3級の範囲に合わせていますので、ホントにはじめて簿記を学ぶ方でも、本書を読めば3時間程度で簿記3級の主要論点と全体像を把握できると思います。各チャプターの最後にはインプットした知識を確認するための章末問題も設けてあります。

本書は、私が大学で会計学を教えたり、監査法人・経理実務や経理コンサルティング業をしたり、知人に簿記を教えたりしたときの経験をもとに作成しています。初学者の方々が感じる疑問点はだいたい共通しています。その点に注意して書きました。

と『はじめに』と題して書いていたら結局長文になってしまいました(; _ _)

チャキチャキ勉強を始めた方がいいと思いますので、残りは『おわりに』に移しました。お時間のある方

だけでかまいませんので、『おわりに』まで目を通していただけますと嬉しいです。
では、さっそく簿記の勉強をスタートさせましょう！

2014年7月 追記：
簿記2級商業簿記の入門書も発売させていただきました。電卓いらずで読める内容となっています。3級の学習が終えたら読んでみてください。経理実務の一般常識など簿記検定以外のことも随所におりませました。ビジネス書を読む感覚で学習できます。

注：本書では断りのない限り、簿記の検定試験とは日本商工会議所主催の簿記検定試験を指しています。

本書は第Ⅰ部（簿記入門の入門編）と第Ⅱ部（簿記3級入門編）から構成されています。目安としては、第Ⅰ部の各Stepは5分程度で、第Ⅱ部の各チャプターは10分～15分程度、合計3時間程度で読めると思います。

第Ⅰ部 簿記入門の入門編 もくじ

Step1の前に

Step1 簿記？会計？どちらがうの？

Step2 複式簿記とは？

Step3 5つの概念を覚えよう！

Step4 実際に仕訳をつくってみよう！

Step5 仕訳に慣れよう！

Step6 商品売買を仕訳しよう！

Step7 決算ってナニ？

第Ⅱ部 簿記3級入門編 もくじ

- 【チャプター1 簿記 3 級入門のために】
- 【チャプター2 現金】
- 【チャプター3 預金】
- 【チャプター4 商品売買】
- 【チャプター5 手形】
- 【チャプター6 有価証券、固定資産、その他】
- 【チャプター7 資本金】
- 【チャプター8 決算の具体的な作業】
- 【チャプター9 決算整理仕訳 1/3 】
- 【チャプター10 決算整理仕訳 2/3 】
- 【チャプター11 決算整理仕訳 3/3 】
- 【チャプター12 伝票】
- 【おわりに】

Step1の前に

突然ですがここで、簿記に関する5つの質問をします。第Ⅰ部を読み終えれば、以下の5つの質問にサクッと答えられるようになります。

初めて簿記を勉強する方にはチンプンカンプンだと思いますが、それで構いませんので、これから身につけることの予習だと思って試しに一読してみてください。

第1問：簿記の5つの概念が言える。

資産、負債、純資産、費用、収益

第2問：商品 100 円を掛けで仕入れたときの仕訳 (三分法) がわかる。

(借)仕入 100 (貸)買掛金 100

第3問：売値 120 円の商品を掛けで販売したときの仕訳 (三分法) がわかる。

(借)売掛金 120 (貸)売上 120

第4問：電気代 500 円を現金で支払ったときの仕訳がわかる。

(借)水道光熱費 500 (貸)現金 500

第5問：決算で作成される、メインの財務諸表の名前2つを言える。

貸借対照表と損益計算書

Step1 簿記？会計？どちらがうの？

初めて簿記・会計を学ぶ多くの方々がまず最初に思う疑問、まずはこれです。

『簿記って何？会計って何？どう違うの？』

“会計”という言葉を知ると、多くの方は、コンビニやレストランなどで『レジでお金を払うこと』を連想するのではないのでしょうか。

日常生活の用語として使用される場合の“会計”は、『お金を払うこと』ですが、一方、学問として用いられる場合の“会計”はというと、

①企業の取引・活動(仕入、生産、販売、給料支払いなど)を帳簿に記入することとそのルール

②その帳簿を世間一般の人(銀行、税務署、株主など)に見せることとそのルール

③企業内での様々な管理のために用いられる数値データを計算することとそのルール

を総称して“会計”と呼んでいるように思われます(それを学問の対象としてとらえたものが『会計学』です)。要は、経理データを利用する人のために、企業の行った取引・活動を帳簿につけるのです。

と説明されても何のことかよくわからないかもしれませんが、入門段階の今は漠然としていても大丈夫です。今後、簿記・会計の勉強をすすめるうちに自然と明らかになっていきます。

この段階では、学問としての“会計”(会計学)は、

『お金を払うことを意味するのではない』ということ、そして『企業内でつけている帳簿に関すること』というイメージを持っていただけでOKです。

要は帳簿のお勉強です。

簿記・会計の大前提ですが、対象としているのは一般家計ではなく、企業(株式会社、有限会社、商店など)です。企業では、日々の取引・活動は帳簿に記入されます。経理部門の従業員や経理担当者が行います。

一般家計でも『家計簿』という名の帳簿をつけますよね。家計簿をつけないと、お金が余るのか、それとも足りないのか、何にお金をたくさん使ったのか、をきちんと把握できません。

それと同じで、企業も帳簿(“企業簿”とはいませんが。。)をつけないと、企業内にどのようなモノがどれほどあり、またいくら儲かったのかなどを把握できません。

ただ、一般家計の場合と異なるのは、『帳簿をつけることが義務となっている』ことです。

義務ということは、帳簿のつけ方がルール化されていなければなりません。全国、あるいは全世界で共通のルールに基づいて帳簿をつける必要があります。

なぜなら、企業ごとに帳簿の付け方が異なってしまうと、帳簿をつくった人以外の人が見たとき、帳簿上の数値が正しいのかどうかの判断もできませんし、他社との比較もできませんよね。家計簿は、他人に見せることを前提としていません。ですのでMyルールで作成してもかまわないのですが、企業の帳簿はそうはいきません。

そして、この“帳簿をつけること”を扱った学問が『簿記』です。『簿記』では、帳簿のつけ方・共通

ルールを学びます。帳簿への記入方法を扱った学問です。帳簿への記入、なので簿記です。
ちなみに一般的には、『会計学』という言葉はあっても、なぜか『簿記学』とは言いません（一部の国家試験で『簿記論』という試験科目はあります）。

学問的な位置づけとしては、『簿記』は、『会計学』の一分野です。
多くの場合、勉強する順番としては、まずは『簿記』を学ぶのが『会計学』を学ぶ第一歩です。『簿記』は『会計学』への入口的な存在、あるいは、簿記は会計学を理解するための土台になっている（ときには中心的存在でもある）、と考えると両者の位置づけがわかりやすいように思われます。



さきほど書いた『会計学』の中身3つをもう一度書きます。簿記は①に含まれます。

- ①企業の取引・活動(仕入、生産、販売、給料支払いなど)を帳簿に記入することとそのルール
- ②その帳簿を世間一般の人(銀行、税務署、株主など)に見せることとそのルール
- ③企業内での様々な管理のために用いられる数値データを計算することとそのルール

Step2 複式簿記とは？

ここでは、『家計簿』と『企業の帳簿』とを比較することによって、簿記の特徴を説明しようと思います。
まずは家計簿。だいたいこんな感じでしょうか。

家計簿		
日付	摘要	入出金
1月20日	給与が振り込まれた	200,000
1月22日	クリーニング代支払	-3,000
1月22日	スーパーにて食料を購入	-4,500
1月25日	クレジットカードで服を購入（9千円）	-
1月28日	先月のクレジット代金引落	-30,000
1月30日	家賃支払	-60,000

A

続いて企業の帳簿。家計簿とほぼ同じ内容のことを書いてあります。

企業の帳簿				
日付	勘定科目	金額	勘定科目	金額
1月20日	普通預金	200,000	売上高	200,000
1月22日	清掃費	3,000	普通預金	3,000
1月22日	食料費	4,500	普通預金	4,500
1月25日	衣料品費	9,000	未払金	9,000
1月28日	諸口	30,000	普通預金	30,000
1月30日	支払家賃	60,000	普通預金	60,000

B C

家計簿と企業の帳簿、ぱっと見て何が違いますか？

家計簿は「摘要」と「入出金」のセット（Aの部分）が1個ですよな。
企業の帳簿は、「勘定科目」と「金額」のセットが2個ありますよね（BとC）。
このように、企業の帳簿は、左と右に分けて、別々のことを書きこみます。この仕組みは『複式簿記』と呼ばれています。これは、全世界共通のルールで、簿記の大前提の一つです。企業の帳簿は、左右で一組の様式（複式）になっています。
そして、この左側（上記ではB）と右側（上記ではC）には名前があります。
左側を『借方』（かりかた）、右側を『貸方』（かしかた）と呼びます。
必ず覚えてください。左がカリカタ、右がカシカタ。

カリカタ？カシカタ？ どっちがどっちか紛らわしい！
という声をヒジョーによく耳にします。多くの初学者の方々がつまづく壁です。
でも安心！覚え方があります！

ひらがなの『り』は、2画目は左にそれていますよね。だから『借方』は左側。
一方、ひらがなの『し』は、右にそれていますよね。だから『貸方』は右側。

簡単！もう間違えませんか。覚えましたか？
左側は●方、右側は●方(←●に漢字を入れてください)です。

複式であること以外で、家計簿と企業の帳簿とで異なる点は、言葉づかいですね。
企業の帳簿に書かれている言葉は、なんとなくカタクルシー感じがしませんか？○○費だとか。これら
中身を説明する言葉は“勘定科目”とか“勘定”と呼ばれます。勘定科目にはいろいろありますが、
(事実上ほぼ)決まった呼び名になっています。共通化する必要があるわけです。

※勘定科目名は本来は原則自由です。中身がわかれば自由に命名していいものです。しかし事
実上ほぼ統一されています。たとえばビルや家屋は『建物』、パソコンや机は『備品』、お金は『現
金』という具合です。

ちなみに；
・『簿記』という言葉の由来には、“帳簿への記入”説の他、英語の“**Book keeping**”説もあります。
簿記を英語で**Book keeping**というのですが、この発音「ブックキーピング」から派生してボキになった
という説です。ブックキーピング、ブッキーピン、ブッキー、ボキ、的な。

・借方貸方というネーミング、お金の貸し借りとは関係ありません。いや、もともとはあったのかもしれま
せんが、真相はよくわかりません。

借方/貸方を英語で**Debit/Credit**(あるいは**Debtor/Creditor**)と言うのですが、これを最初に日本語
に翻訳したのは福沢諭吉氏が活躍していた時代の人です(ご本人かも。。。?)。この時代に日本
に簿記が入ってきたわけです。福沢諭吉氏は簿記の本も著しています。

ちなみに借方/貸方という複式簿記のスタイルが生まれたのは500年以上前で、イタリア人数学者が
考案したものです。現在では簿記といえば、全世界で複式のスタイルです。(ちなみにアメリカ会計
学会会長も務めたことのある重鎮日本人会計学者が三式簿記を考案しています。)

それにしてもなぜ左を借方、右を貸方と命名したのでしょいか。。。ワタクシ、会計学と相当長いこと
お付き合いしてきましたが、未だになぜ左が借方で右が貸方なのかまったくわかりません。これを説
明できる人や文献と出会ったこともありません。申し訳ありませんが、とりあえずは『左が借方、右が
貸方』、覚えてください。

Step3 5つの概念を覚えよう！

簿記では、帳簿に記入する際、複式簿記の原理にしたがい、左右に分けて記入していくのですが、何が借方（左）に記入されて、何が貸方（右）に記入されるのかを判定するルールが存在します。ここでもう一度、さきほどの企業の帳簿を見てみましょう。

企業の帳簿				
日付	勘定科目	金額	勘定科目	金額
1月20日	普通預金	200,000	売上高	200,000
1月22日	清掃費	3,000	普通預金	3,000
1月22日	食料費	4,500	普通預金	4,500
1月25日	衣料品費	9,000	未払金	9,000
1月28日	諸口	30,000	普通預金	30,000
1月30日	支払家賃	60,000	普通預金	60,000

B

C

例えば、この例では、1月20日には、普通預金は借方（B側）に記入されていますが、他の日には普通預金は貸方（C側）にも記入されています。どういう意味だと思いますか？

『入金の場合は借方、出金の場合は貸方だ！』
って思った方、ほぼ正解！

ではご説明します。
まず、簿記・会計には、5つの概念があります。
資産、負債、純資産、費用、収益です。
この5つ、すべて暗記してください。非常に大切です。
でも、どうせ覚えるなら、以下の式で覚えてください。

『資産 = 負債 + 純資産
そしてあとは費用と収益』

このままの形で覚えてください。この形で覚えると、後になって楽です。必ず覚えてください。（残念ながらとくに覚え方はありませんが。。。）
『しさんイコールふさいタスじゅんしさん
そしてあとはヒヨウとシュウエキ』
これが言えないと、この先簿記はチンプンカンプンです。暗記できたら、これより先に進んでください。

暗記しましたか？

○○＝○○＋○○○

そしてあとは○○と○○

簿記では、会社が金銭的な価値で持っているもの・背負っているもの・負担するもの等は、すべてこれら5つの概念のうちのどれかに分類して帳簿につけます。

逆に言うと、金銭的な価値がないもの・不明なものは簿記の対象ではありませんので帳簿にはつきません(夢、希望、運、評判、従業員の生活とかは、どんなに会社が持っていたても、また背負っていたても、簿記の対象外です)。

では、厳密な定義は抜きにして、これら5つの概念を簡単に説明します。

●資産とは；

会社にとって資産とは、財産や権利などです。イメージは「持っているプラスなもの」という感じでしょうか。たとえば、現金、預金、債権(売掛金、未収金、貸付金など)、商品、株式、土地、建物、備品(机、パソコンなど)は資産に含まれます。有形のものだけでなく無形のもの(債権)も含まれます。

※売掛金(うりかけきん)とは、商品をつけて売ってまだ代金を回収していない段階の「ツケ代金を請求できる権利」のことです。「金」が付きますがお金ではなく権利(債権)です。未収金もお金ではなく債権です(商品以外のものを販売したときのツケ代金を回収できる権利です)。

●負債とは；

会社にとって負債とは、マイナスの財産や義務などです。イメージは「持っているマイナスなもの(つまり背負っているもの)」という感じでしょうか。たとえば、借入金(かりいれきん: 借金のことです)や買掛金や未払金などが負債に含まれます。

※買掛金(かいかけきん)とは、商品をつけて購入してまだ代金を支払っていない段階の「ツケ代金を支払わなくてはならない義務」のことです。これも「金」が付いていますが、お金ではなく、債務です。

未払金もお金ではなく債務です(商品以外のものを購入したときのツケ代金を支払う義務です)。借入金自体もお金ではなく法律上の債務です。

●純資産とは；

これが一番説明が難しいのです、、、。簿記の教科書では、『純資産は資産と負債との差額である』と説明されます。たしかに定義はそうなのですが、それではわからないと思います、、、。純資産とは、『会社が会社のオーナー(株式会社では株主)に対して負っているもの』とでもいいましょうか。もしくは、『企業財産に対するオーナーの取り分』とでもいいましょうか。例えば「資本金」がそうなのですが、、、これは簿記の勉強をすすめていくといずれわかる概念です。この説明は、第Ⅱ部のチャプター7に譲ります。今の段階では、概念は理解していなくても結構です。入門の入門段階ではあまり出てきませんので。

●費用とは；

経費イメージのものです。たとえば家賃の支払い(支払家賃)、電気料金(水道光熱費)、電話代

(通信費)、給料などが費用の例です(企業にとっては、給料は払うものです。もらうものではありませんね)。

●収益とは;
収入イメージのものです。売上高、手数料収入、配当収入などが収益に該当します。

簿記では、すべての取引（企業活動）を、
まず①『どの勘定科目で表現するか』を考え、
次に②その勘定科目は、5つの概念のうちどれに該当するかを考えます。
その際、同時に『増加（発生）するのか・減少するのか』ということも併せて考えます。

たとえば、『お金を受け取った』を簿記的に考えると、

① お金の勘定科目は「現金」である。

② 現金は「資産」に分類される。そして受け取ったので「増加」である。

よって「現金という資産の増加」であると考えます。

ちなみに、資産・負債・純資産については「増加」「減少」と表現することが多いのですが、費用・収益については「増加」の他「発生」ということも多いです。（発生の反対は「取消」ですが、これはあまり出てきません。）

では簡単なもので練習しましょう。

練習1；『100万円の土地を現金で買った』という取引を簿記的に分類してみます。

土地の勘定科目は「土地」です。

土地は「資産」です。それを“買った”ので増加です。よって「土地という資産の増加」です。

でも、増加したり減少したりしたのは、土地だけではありませんね。現金も増減しましたね。そこで、現金についても考えます。『現金という資産の減少』ですね。この取引では土地の増加と現金の減少が同時に起こったわけです。

では、また練習してみましょう。

練習2；『電気代10万円を現金で支払った』はいかがですか？

電気代の勘定科目は「水道光熱費」です。「水道光熱費」という「費用」が「発生」し、その一方で「現金」という「資産」が「減少」しましたね。

では、最後にもう一つ。

練習3；『銀行と借金100万円の契約をし、普通預金に入金された』はどうでしょうか？何が増減（あるいは発生）しましたか？

答えは、
「普通預金という資産が100万円増加した」、そして
「借入金という負債が100万円増加した」です。お金を借りると、手元のお金は増える一方、債務も増えるわけです。

ここまで大丈夫ですか？ここまでなんとなくでも理解できたら、次のStep4に進んで下さい。例題をいくつか出します。

Step4では、さきほど覚えてもらった式を活用してさらにブラッシュアップしていきます。

さきほど覚えてもらった式、コレですね；

資産＝負債＋純資産
そしてあとは費用と収益

Step4 実際に仕訳をつくってみよう！

Step3 で覚えていただいた式を思い出して下さい。

『資産＝負債＋純資産』
そしてあとは費用と収益』でしたね。

ではまずは『資産＝負債＋純資産』について。
これは、増加したときに帳簿の借方側に記入するのか、貸方側に記入するのか、を表しています。
ということかという、
この式の左辺には『資産』があります。資産が増加したときは、帳簿の借方に記入するということです。
また、式の右辺には『負債』と『純資産』があります。負債や純資産が増加したときには、帳簿の貸方に記入するということです。

そして「費用と収益」については、費用が増加（発生）したら借方、収益が増加（発生）したら貸方、という意味です。

そして、減少したときはそれぞれ増加したときの逆側です。
たとえば資産の減少は貸方に記入されますし、負債が減少したら借方へ記入されます。

では先ほどの練習1『100万円の土地を現金で買った』はどのように記帳されるかという、
土地という資産の増加は借方へ
現金という資産の減少は貸方へ
記入します。以下のように勘定科目と金額をセットで記入します。
(借)土地 1,000,000 (貸)現金 1,000,000
です。なお、このような“借方貸方”をセットにしたものを『仕訳』(しわけ)と言います。「仕分」ではなく「仕訳」です。仕訳を帳簿に書くことが簿記なんです。正しい仕訳ができるようになることが、簿記をマスターすることなんです。
ちなみに仕訳の借方の金額と貸方の金額は必ず一致します。初めて簿記を習ったとき、私はこれが不思議でならなかったのですが、必ず一致します。

それでは練習2;『電気代 10万円を現金で支払った』の仕訳はどうなるでしょうか？

答えは
(借)水道光熱費 100,000 (貸)現金 100,000
です。水道光熱費という費用が発生したので借方へ記入し、現金という資産が減少したので貸方へ記入します。

練習3;『銀行と借金 100万円の契約をし、普通預金に入金された』の仕訳はどうなるでしょうか？

答えは

(借) 普通預金 1,000,000 (貸) 借入金 1,000,000
です。普通預金という資産が増加したので借方へ、借入金という負債が増加したので貸方へ記入します。

簿記のテキストでは、通常「資産の増加は借方へ、減少は貸方へ」「負債の増加は貸方へ、減少は借方へ」というふうに機械的に覚えさせようとする人が多いように思います。これを文字通りに覚えろと言われてもナカナカとつきづらと思います。
そのような覚え方よりも、上記のようにまず「資産＝負債＋純資産」という等式を覚えたほうが、後々楽ですよ絶対。
(この等式は、貸借対照表等式と言います。私の説明のように、この等式と、各増減・貸借とを結び付けて説明した方が理解が楽なので、私は最初にこの等式を覚えていただきました。)

なお、簿記検定の勉強では、『仕訳帳』という名の帳簿に仕訳を直接記入(記帳)していくことになると思います。実務では、仕訳はまず紙の『伝票』に記入してから、その伝票をパソコン画面上で帳簿システム(経理ソフト)内の仕訳帳に入力していくことがオーソドックスな流れではないかと思います。
したがって、これ以降本書では『仕訳する』ことを『仕訳を起こす』『伝票を作成する』『記帳する』などと表現している箇所があっても、すべて同じ意味とご了承ください。

【おまけ】
実務ではさらに『伝票を切る』とも言います。実際よく使います。『仕訳作って』の代わりに『伝票切って』と言うわけです。
先輩に『伝票切って！』と頼まれた新人が、実際に伝票をハサミで切ってしまった、という経理部にアリガチなネタがあります。まあこれは、ありそうで実際にはない話ですね。。。。
と言いたいところですが、
私の周りにホントに一人いました（；ー _ ー）

では、ここまでの知識を確認するために、次の Step5 でいくつか例題を出します。これらを見れば“仕訳”にだいぶ慣れることができると思います。

Step 5 仕訳に慣れよう！

『仕訳』に慣れるために、以下の例題を仕訳してみてください。当然最初はわからないと思いますので、答えを見て慣れて、そして覚えていってください。

例題1；『9百万円のビルを購入した（明け渡しも受けた）。代金は現金で支払った。』
（借）建物 9,000,000 （貸）現金 9,000,000
（建物という資産が増加し、現金という資産が減少しました）

例題2；『9百万円のビルを購入した（明け渡しも受けた）。代金は月末払いとしたため、まだ払っていない。』
（借）建物 9,000,000 （貸）未払金 9,000,000
（建物という資産が増加し、ツケ払いの債務（未払金）という負債が増加しました。例題1と異なるのは、代金を払ったのかどうかという点だけです。）
ちなみに、ビルは通常「商品」ではないため、ツケ代金支払債務は「未払金」という勘定科目を用います。「商品」の場合は貸方には「買掛金」という勘定科目を用います。

例題3；『月末になったため、上記例題2の代金を普通預金から支払った。』
（借）未払金 9,000,000 （貸）普通預金 9,000,000
（普通預金という資産が減少し、その結果、未払金という負債が減少しました。）

例題4；『5百万円の土地を購入した（明け渡しも受けた）。代金のうち2百万円は現金で支払い、残額は月末払いとしたためまだ払っていない。』
（借）土地 5,000,000 （貸）現金 2,000,000
（貸）未払金 3,000,000

いかがでしょうか。“仕訳”をなんとなく理解していただけましたでしょうか。
企業内の帳簿は、このような複式簿記の形式で記入されています。

そして次は一番大事な勘定科目である『商品』について書きます。簿記では商品の扱いが一番大切なんです。

Step6 商品売買を仕訳しよう！

ここまでなんとなく仕訳をご理解いただきましたら、次は『商品』について書きます。企業（そして簿記）にとっては、商品売買が中心となる活動です。

簿記を勉強していくと、『売買したのは商品なのか、商品以外のものなのか』で判断が分かれることがあります（用いる勘定科目も異なっていきます）。『商品の話をしているのかどうか』という視点が簿記には大切なのです。

（残念ですが、このことを強調して説明しているテキストはあまりないように感じられます。）

商品は毎日、それこそ何十個、いや何万個以上も仕入・販売が行われるものですので、その記帳方法も、より簡便な仕訳、あるいは、より管理目的に適った仕訳（記帳方法）が考案されています。

ここでは、商品売買に関して、代表的な二つの記帳方法を簡単に解説します。

これまで解説してきた方法に適った記帳法と、そうでない記帳法です。

前者は『分記法』（ぶんきほう）と呼ばれます。後者にはいくつかあるのですが、一番メインとなるやり方は『三分法』（さんぶんぽう）です。

（両者とも大切ですが、簿記を勉強していくと、ほとんど三分法しか使わないようになると思います。）両者の違いを例示します。

例示；
9月1日『商品1個を80円で購入し、代金は現金で支払った。』
9月8日『上記商品を100円で販売し、代金は現金で受け取った。』

まずは確認です。これは文字通り『商品』の売買ですね。
『商品』の話なので、次にどのような記帳方法で記帳するかを考えます（検定試験等では、商品に関する記帳方法は指示されていたり、どこかしらに明示・暗示されています）。

1) 分記法で仕訳する場合
9月1日『商品1個を80円で購入し、代金は現金で支払った。』
(借)商品 80 (貸)現金 80
（商品という資産の増加と、現金という資産の減少）
9月8日『上記商品を100円で販売し、代金は現金で受け取った。』
(借)現金 100 (貸)商品 80
（貸）商品売買益 20
（商品という資産の減少、現金という資産の増加、その差額が収益）

となります。9月8日に20円の収益（儲け）が発生しました。
このように、分記法は商品の売買を『商品』『商品売買益』という二つに分けて記帳する方法です。
“分割記入法”が語源らしいです。
商品は資産ですので、増加したら借方『商品』、減少したら貸方『商品』です。

2) 三分法で仕訳する場合
9月1日『商品1個を80円で購入し、代金は現金で支払った。』
(借)仕入 80 (貸)現金 80
9月8日『上記商品を100円で販売し、代金は現金で受け取った。』
(借)現金 100 (貸)売上 100

となります。シンプルですね。
三分法は、商品の売買を、『仕入』『売上』（及び『繰越商品』）という3つに分けて記帳する方法です（“繰越商品”は決算のときのみ使用する勘定科目ですのでここでは出てきません。後述します。）。
商品を買ったときは「仕入」を用い、売ったときは「売上」を用い、そして決算のときには「繰越商品」を用います。「商品」という勘定科目を用いません。

分記法だと、20円の儲けをすぐ算定できます。一方、三分法だと、すぐには算定できません。これだけを考えると、分記法の方がすぐれているように思われるかもしれません。

しかし、分記法で仕訳するには、『仕入れたときの原価がいくらなのか』を常に把握している必要があります。上記例示で言いますと、9月8日になって、『9月1日に仕入れた際、いくらで仕入れたんだっけ？』と忘れてしまった場合、いちいち調べなければなりません。

また、この例示では商品1個だから簡単ですが、商品の種類が何千何万となったり、同じ種類の商品でも仕入れる日によって単価が異なったりした場合、それぞれの仕入値(原価)なんてとても把握できませんよね。ここに分記法の限界があるわけです。

したがって、この点、商品を販売したときに単に「売上」とだけ記帳すればよい三分法にメリットがあります。

商品売買の記帳方法には分記法、三分法以外にもいくつかありますが、それぞれメリット・デメリットがあります。詳細は簿記の教科書に譲ります。

通常、最初は分記法を習ったとしても、商品売買に関してはいずれ三分法しか使わなくなります。

注意;たとえ商品売買に三分法を用いていたとしても、他のもの(備品や株式など)の売買には分記法を用います。

Step7 決算ってナニ？

私の個人的な体験談なのですが、大学に入学して会計学の講義をうけていて、最初にぶつかった大きな壁が『決算』でした。決算というものが何なのか、まったく知りませんでしたし、よくわかりませんでした。考えたこともなかった、というのが本音です。

決算ってなんでしょう？

“決算”といえば「決算セール」を連想する方も多いのではないのでしょうか？

しかし、「決算」は「セールをすること」ではありません（少なくとも経理的な意味では）。

通常、企業は「決算」を毎年行います。そう、決算は「行事」なのです。年間行事なのです。日本の多くの会社は、毎年4月1日から翌年3月31日の1年間を単位（会計期間といいます）としていて、毎年3月31日を“決算日（期末日）”としています。ちなみにスーパーなどの流通業界は2月末日を決算日としていることが多いです。

それを前提にして説明しますと；

決算は

その企業が1年間（4月1日～3月31日）でいくら儲けたのか、

その企業が決算日（3月31日）現在で、資産や負債などをいくら持っている・背負っているのか、などを把握するためのイベントです。

（“決算セール”は、決算に向けて決算前にバーゲンセールをすることによって、売上を一気に増やし、かつ在庫も一気に減らすために行われるもの、ということでしょうか。）

経理部門では毎日仕訳がおこり、そのすべてが帳簿に記帳されていきます。

仕訳は、各勘定科目の「増加・減少」を表しています。もっと言いますと、若干語弊があるかもしれませんが、「仕訳は各勘定科目の増減を表してはいるが、合計（残高）までは表していない」と言うこともできます。1年間の仕訳を集計しないと残高がわからないのです。

また、日常ではつくらずに決算のときのみ作成される仕訳（決算整理仕訳）もあります。

その他、『棚卸』を行って商品等の在庫状況をカウントするのも決算の作業の一つです。カウントした結果と、帳簿上の数値が一致しているかどうかの確認が行われます。

つまり、日常業務で把握していない残高を計算したり、日常業務では記帳されないような仕訳を記帳することが決算の作業です。

- ・1年間で収益がいくらだったのか
- ・1年間で費用はいくらだったのか
- ・その結果1年間でいくら儲かったのか
- ・決算日時点で、資産や負債などはいくらあるのか

決算では、これらを把握するために1年間の仕訳を集計し、貸借対照表や損益計算書と呼ばれ

る表を作成します。これらの表（まとめて財務諸表と呼ばれます）を作成するのも簿記での作業です（経理部門の作業です）。

※貸借対照表(たいしゃくたいしょうひょう)について;

初学者の方々に多いのですが、賃借対照表ではありませんよ。貸借対象表でもありません。
これは、決算日時点の資産・負債・純資産それぞれの残高を一覧にした表です。貸借対照表は大きく左右に分かれていて、左側(借方)には資産が、右側(貸方)には負債と純資産の項目が羅列されています。
英語で **Balance Sheet** といいますので、B/S (ビーエス)と言われることが多いです。

貸借対照表 (単位：万円)			
資産の部		負債の部	
現金・預金	100	借入金	700
売掛金	250	社債	1,000
商品	550		
備品	300		
建物	500		
土地	300		
		純資産の部	
		資本金	300

このとおり、『資産＝負債＋純資産』の形になっています。

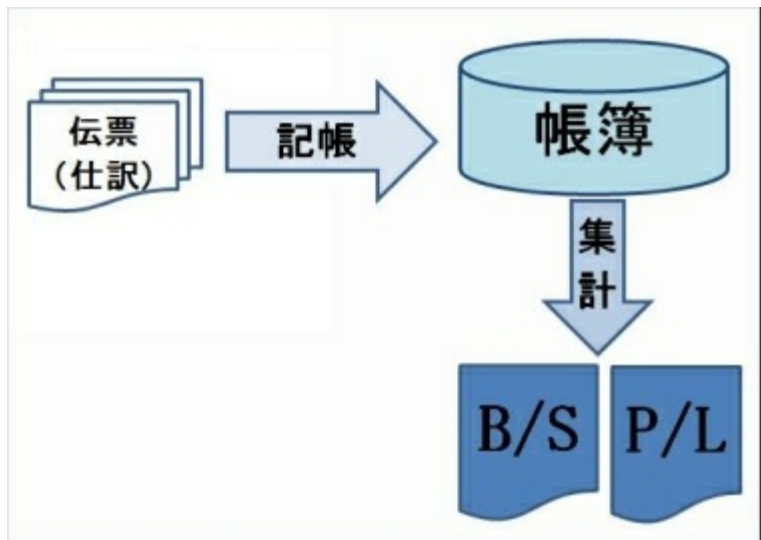
※損益計算書(そんえきけいさんしょ)について;

やはり同様に、損得計算書ではありません。。。これは、前年度の決算日の翌日(＝今年度の初日)から今年度の決算日までの 1年間(つまり例えば 4 月 1 日から翌年 3 月 31 日までの 1 年間)の間に、収益の累計がいくらだったのか、費用の累計がいくらだったのか、を一覧表にしたものです。その結果として算出される収益と費用との差額が損益です。
費用<収益であれば利益(黒字)、費用>収益であれば損失(赤字)です。
英語(とくにイギリス英語?)で **Profit and Loss statement** といいますので、(日本では) P/L (ピーエル)と言われることが多いです。
(アメリカでは **Income statement** と言われることの方が圧倒的に多いと思います)

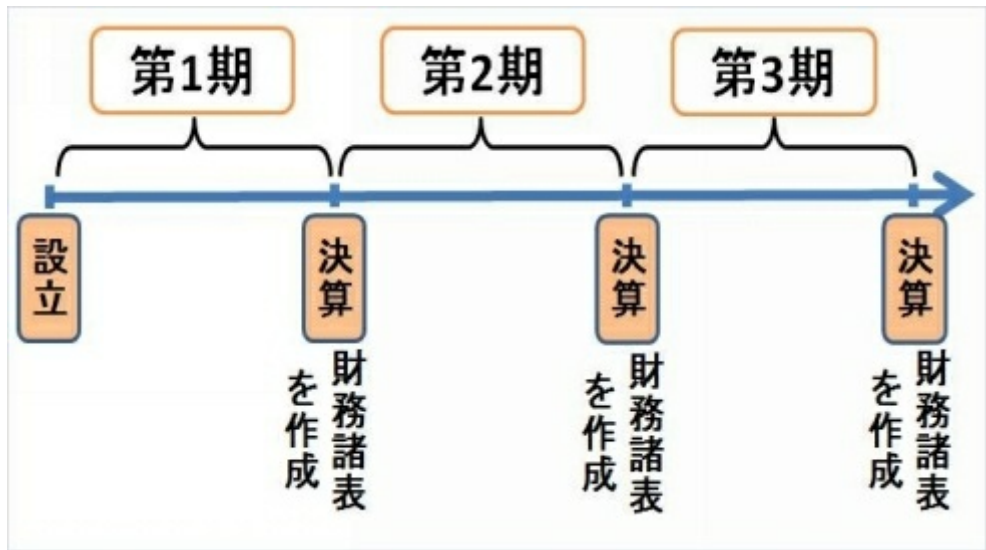
損益計算書 (単位:万円)		
費用		収益
水道光熱費	300	売上高 1,000
旅費交通費	200	受取配当金 200
支払利息	50	
減価償却費	450	
利益	200	

貸借対照表と損益計算書の名称は必ず覚えてください。
また、『資産、負債、純資産は貸借対照表に記載され、費用と収益は損益計算書に記載される』も覚えてください。

経理部門では日々仕訳がおこり、その集大成として決算のときに2つの財務諸表を作成します（3月31日までの仕訳を集計するので、4月1日以降に作業を行います）。



財務諸表は、（最低）一年に一度作成する必要があります。税務署に提出したり、銀行に見せたり、経済ニュース等で世間に公表して自社株を買ってもら判断材料にしてもらったり、社長が見て経営判断したり、と様々な用途に使われるわけです。



ここまでで簿記の入門の入門は終了です。いかがでしたでしょうか？

Q1;
簿記の5つの概念は？

資産、負債、純資産、費用、収益。
できれば『資産＝負債＋純資産』という式も言えるようにして下さい！

Q2;
資産が増加したときは、借方 or 貸方？

借方。
ちなみに借方は左側ですね。

Q3;
費用が発生したときは、借方 or 貸方？

借方。

Q4;
電気代 500 円を現金で支払ったときの仕訳は？

(借) 水道光熱費 500 (貸) 現金 500

水道光熱費という費用が発生したので借方へ。貸方は資産の減少です。

Q5;

銀行と借金 100 万円の契約をし、普通預金に入金されたときの仕訳は？

(借) 普通預金 1,000,000(貸) 借入金 1,000,000

普通預金という資産が増加したので借方へ、借入金という負債が増加したので貸方へ。

Q6;

三分法を採用している場合の商品売買で用いる3つの勘定科目名は？

仕入、売上、繰越商品。
ちなみに「繰越商品」は決算のときにしか用いられない勘定科目です。

Q7;
商品 100 円を掛けで仕入れたときの仕訳 (三分法) は？

(借) 仕入 100(貸) 買掛金 100

Q8;
売値 120 円の商品を掛けで販売したときの仕訳 (三分法) は？

(借) 売掛金 120(貸) 売上 120

Q9;
決算で作成される、メインとなる2つの財務諸表の名前は？

貸借対照表 (たいしゃくたいしょうひょう)

と

損益計算書 (そんえきけいさんしょ)。

それぞれ英語名

Balance **s**heet、**P**rofit and **l**oss statement

から、“ビーエス (B/S)” “ピーエル (P/L)” と呼ばれます。

この2つが中心ですが、財務諸表には他にもあります。

Q10;
資産、負債、純資産、費用、収益のうち、**B/S** に記載されるのは？

資産、負債、純資産。

Q11;
資産、負債、純資産、費用、収益のうち、**P/L**に記載されるのは？

費用、収益。

では次からはいよいよ第Ⅱ部、簿記３級の入門です！

第Ⅱ部 簿記3級入門編

もくじ

- 【チャプター1 簿記 3 級入門のために】
- 【チャプター2 現金】
- 【チャプター3 預金】
- 【チャプター4 商品売買】
- 【チャプター5 手形】
- 【チャプター6 有価証券、固定資産、その他】
- 【チャプター7 資本金】
- 【チャプター8 決算の具体的な作業】
- 【チャプター9 決算整理仕訳 1/3 】
- 【チャプター10 決算整理仕訳 2/3 】
- 【チャプター11 決算整理仕訳 3/3 】
- 【チャプター12 伝票】

CHAPTER 1 簿記 3 級入門のために

仕訳を覚えることが簿記をマスターすること。

これは過言ではありません。

しかし、簿記 3 級では、仕訳をマスターすること以外にも、いろんな『帳簿』の作成の仕方や締め方もマスターすることになります。帳簿作成などの手作業が非常に多いのですが、その場合でも、『仕訳』を理解していないと、ただ作業をしているだけになってしまい、『果たして今自分は何をやっているのだろう??』という状態に陥ってしまいます。

『帳簿』と『仕訳』は関連しています。

(仕訳帳に)仕訳したことを他の帳簿(補助簿)につけたり、その逆で、補助簿で管理していることに基づいて仕訳を作成したりするわけです。

ですので、まずは各分野の基本的な仕訳をマスターすることが簿記 3 級マスターへの近道だと思います。

でも、その『仕訳』をマスターするためには、そもそも論としてその取引や仕組み自体を理解していないといけないのです。逆に、その取引や仕組み自体を理解していれば、仕訳を理解することは容易です。

本書では、仕訳に至るまでのプロセス(取引・仕組みの理解)を大切にして書いています。是非最後まで読んでください！

【簿記の入門の入門の復習】

さて、まずはここでサラッと『簿記の入門の入門』を復習しておきましょう。

仕訳の理屈を説明します。たとえば、

電気代 500 円を現金で支払ったときの仕訳は以下の通りです；

(借)水道光熱費 500 (貸)現金 500

借方は、費用の発生ですね。一方貸方は資産の減少ですね。

金額はともに 500 円です。このように一つの仕訳で借方の金額と貸方の金額は必ず一致します。

(場合によっては一致させます。)

『水道光熱費』のような、簿記特有の勘定科目名に慣れることも大切ですね。他には、たとえば自動車は『車輛運搬具』、机やパソコンは『備品』、などなど。これらは覚えるしかありませんが、勉強を進めるにつれて自然と身につくと思いますので、頑張って暗記する必要はないと思います。

さて、貸借の金額が同額になることは、たとえ勘定科目が多くなっても変わりません。たとえば事務所用として 20 万円のパソコンを購入し、5 万円はその場で現金で払い、残額をツケとした場合では

(借)備品 200,000 (貸)現金 50,000

(貸)未払金 150,000

このとおり、貸借の金額は一致します。簿記上級になると、一個の仕訳で借方貸方ともに4～5個の勘定科目を書いたりします。

ちなみに、“ツケ”を表す勘定科目名についてですが、取引の対象が『商品』なのか『商品以外』なのかで変わります。この例では備品(商品ではない)なので“未払金”ですが、もしこれが商品であれば“買掛金”です。簿記では名前を使い分けます。

(厳密には、さらに『未払費用』とも使い分けます。正確な使い分けは、中～上級で学びます。)

『簿記の入門の入門』の復習は以上です。

次に、『決算』について、簿記3級を見据えた全体像を簡単に説明します。

【決算全体像】

簿記の個別論点を勉強する前に、第Ⅰ部の復習がてら、より具体的な決算作業を説明します。

企業(株式会社、商店など)は、最低一年に一度、決算を行う必要があります。通常は1年ごとに毎年決算を行うので、第Ⅱ部でも1年ごとの決算を前提とします。

さて、決算とは、ザックリ言ってしまえば『その1年間でいくら儲かったのか』などの計算をすることです。

そのため決算になると、その1年間(1会計期間、1会計年度といいます)の仕訳を集計します。その結果を貸借対照表と損益計算書にまとめます。

貸借対照表と損益計算書を作ることが、『簿記』の、そして『決算』の一番大きな目標です。そこに向かって日々仕訳をし、決算では仕訳を集計するのです。

上記では、『決算になると』と書きましたが、より厳密な表現をすれば、決算作業の時期になると、という意味です。検定試験でも『決算になった』というような表現が用いられていると思います。

日本では多くの会社が、4月1日から翌年3月31日の1年間を1会計期間(1会計年度)としています。たとえばこの場合、4月1日を期首、3月31日を期末日(決算日)といい、期末日の翌日4月1日から経理部では決算作業がスタートします。決算になると経理部は1年間の仕訳を集計します。この時期が経理部にとって一年で最も多忙な時期です。

以下でも4月1日から3月31日を1会計期間として解説していきます。

簿記3級では、個人商店が取引主体(つまり主役)であることが多く、その場合は通常1月1日から12月31日が1会計期間です。(「会社」ではなく個人経営の商店なので所得税法との関連でそうなります。余談ですが。)

1月1日から12月31日までの1年間を1会計期間としている場合でも考え方はまったく同じで、決算作業は期末日の翌日である1月1日以降に行われることになります。なお検定試験で問題を解くときには、その企業の会計期間が何月何日から何月何日までなのかの確認をしないと、とんでもないことになりかねません。

ちなみに、外資系企業は12月31日を期末日としている企業が一番多いように思います(諸外国では12月31日を期末日にしている企業が多いためです)。つまり、外資系企業の経理部に勤めると、正月明けの時期が一番の繁忙期だったりします。一方、多くの日本企業の経理部は4月上旬～中旬の、世間が花見でワイワイやっているところが一番の繁忙期となります。

話が若干それてしまいましたが、つまり決算とは、以下の作業を行うことです；

- 4月1日から3月31日までの1年間の仕訳のうち、収益の累計額と費用の累計額がそれぞれいくらで、その差額がいくらなのかを算出します。

収益累計 > 費用累計であれば利益(いわゆる黒字)、逆であれば損失(いわゆる赤字)です。また同様に1年間の仕訳を集計して資産、負債、純資産がそれぞれいくらあるのかを算出します。

- その結果をそれぞれ損益計算書と貸借対照表に表します。

また、決算にしか作成しない仕訳(“決算整理仕訳”といいます)もいくつかあります。

つまり、決算では、4月1日から翌年3月31日まで(期中)に生じた仕訳を集計するのはもちろん、決算作業で作成された仕訳(決算整理仕訳)も集計の対象とします。

以上のことを、経理部での決算作業と結び付けてもう一度説明しますと、決算になったら、経理部では(＝簿記検定試験では)

Step ① 3月31日までの1年間の期中仕訳をいったん集計する。

Step ② 決算整理仕訳をつくる。

Step ③ 決算整理仕訳をおりまぜて仕訳を再集計する。

この作業の最後に、利益を算定する。

Step ④ そして貸借対照表と損益計算書をつくる。

上記①～④の決算作業自体は、期末日3月31日の翌日4月1日以降に行います。

したがって、決算整理仕訳が作成されるのは4月1日だったりそれ以降だったりします。しかし、決算整理仕訳の伝票上に記入される日付は3月31日です。

たとえば4月3日に決算整理仕訳の伝票を作ったとしても、そこに書かれた決算整理仕訳はあくまでも前会計期間の仕訳なので3月31日付の仕訳とします。4月3日付の仕訳ではありません。3月31日に起こすべき仕訳を4月3日に起票しただけ、したがって3月31日付の帳簿に反映する(帳簿の3月31日のページに記入する)、ということです。

(通常、簿記のテキストではナカナカここまで説明していないかもしれませんが、より具体的なイメージがわくように書きました。)

よくわからなかったとしても、今の段階では、『期中の仕訳の他に、決算で作成する仕訳がある』という理解をしておくだけで構いません。

この“決算整理仕訳”については、チャプター9～11で説明します。

では本チャプターはここで終了です。章末問題で知識を確認してみてください。

Q1;
9百万円のビルを購入した (明け渡しも受けた) 。代金は現金で支払った。仕訳は？

(借) 建物 9,000,000 (貸) 現金 9,000,000
建物という資産の増加、現金という資産の減少です。

Q2;
9百万円のビルを購入した (明け渡しも受けた) 。代金は月末払いとしたため、まだ払っていない。仕訳は？

(借) 建物 9,000,000 (貸) 未払金 9,000,000

貸方はツケ代金を払わなければならない義務を表す勘定科目です。ちなみに、ビルは通常「商品」ではないため、ツケ代金支払債務は「未払金」という勘定科目を用います。

もし「商品」の購入であれば貸方は「買掛金」です。

Q3;

月末になったため、Q2 の未払代金 9 百万円を普通預金から支払った。仕訳は？

(借) 未払金 9,000,000 (貸) 普通預金 9,000,000

普通預金という資産が減少し、その結果、未払金という負債が減少しました。

Q4;

5 百万円の土地を購入した (明け渡しも受けた) 。代金のうち 2 百万円は現金で支払い、残りの残額は月末払いとしたためまだ払っていない。仕訳は？

(借) 土地 5,000,000 (貸) 現金 2,000,000
(貸) 未払金 3,000,000

Q5;

日本の多くの会社は、毎年 4 月 1 日から翌年 3 月 31 日の 1 年間を単位 (会計期間) としているが、たとえばこの場合の、毎年 3 月 31 日を何と言う？

期末 (期末日、決算日)。
より厳密にいうのであれば、3 月 31 日の真夜中 24 時が期末です。
ちなみに、4 月 1 日は期首です (4 月 1 日 0 時 0 分)。

Q6;
決算のときにしか作成しない仕訳の総称を何という？

決算整理仕訳。

CHAPTER 2 現金

ではまず最初の個別テーマ『現金』です。
手元にある現金（貨幣と紙幣）を、『現金』という勘定科目を用いて仕訳します。
“手元”というのは、たとえば経理部の出納係が管理している金庫内にあるお金です。預金ではありません。あくまでも現金です。「現金」は資産ですので、受け取ったら（手元現金が増加するので）借方、支払ったら（手元現金が減少するので）貸方へ仕訳します。以下の仕訳で確認してください。

たとえば、電気代1万円を現金で支払ったら
（借）水道光熱費 10,000 （貸）現金 10,000

売掛金 1万円を現金で回収したら
（借）現金 10,000 （貸）売掛金 10,000

と仕訳していきます。
出金したら『現金』を貸方へ、入金したら『現金』を借方へ。このように入金や出金があった都度、仕訳をつくるわけです。
実務でも『現金』に関してはこのような仕訳を毎日ひたすら繰り返すことが、現金に関する仕訳の中心です。“現金”について覚えることは、とくに何もなければたったのこれだけなんです。ここまで簡単ですよ。

しかし、これだけだと簡単すぎませんか？さすがにこれで終わるはずはありませんね。これでは学問的にも検定試験的にもおもしろくありません。
つまり、簿記の教科書や検定試験等では、『現金』といえば、下記の3つの論点が中心となります。

- 論点その1“通貨代用証券”
- 論点その2“現金過不足”
- 論点その3“小口現金”

【論点その1】通貨代用証券

さきほど、『現金』という勘定科目は、貨幣（100円玉、10円玉など）と紙幣（1,000円札や10,000円札）が対象である旨お伝えしました。

しかし、実はそれだけではありません。

すぐにお金に換金できるものも簿記では『現金』扱いします。たとえば、（あまり聞きなれないものかもしれませんが）配当金領収証や郵便為替証書はすぐにお金に換金できますので、『現金』と同じ扱いをします。つまり、これらを受け取ったら、借方は『現金』なのです。『○○証書』などという勘定科目ではないのです。（ちなみにこれらを“通貨代用証券”と呼びます。）



たとえば、売掛金100円の回収として郵便為替証書を受け取ったら、
（借）現金100（貸）売掛金100

です。違和感があるかもしれませんが、借方は『現金』なのです。

ちなみに、通貨代用証券の中でとくに注意を要するのが、『他人振り出しの小切手』です。通貨代用証券の中では一番大切ですし、小切手の話なのでCHAPTER 3で別途説明します。

このように、現金ではないけれども簿記では『現金』として扱うものがいくつかあります。詳細は簿記検定試験用のテキストに譲りますが、簿記上の『現金』は、貨幣・紙幣のみではなく、すぐに換金できるものも含まれる、ということは覚えておいてください。

【論点その2】現金過不足

毎日、入金や出金は頻繁に起こります。日中に『入出金 & 仕訳を記帳』を何回も行い、夕方になって帳簿上の『現金』残高と、実際の手元現金残高が一致しているかどうかを確認します（あるいは週に一度毎週金曜日の夕方に確認したりします）。一致していれば問題ないのですが、もしかしたら仕訳の金額を間違えたかもしれませんし、お金を紛失したかもしれません。不一致が判明したらどう経理処理（仕訳）したらいいのでしょうか？という論点です。

不一致であることがわかった時点で、とりあえず暫定的に『現金過不足』という勘定科目を使って、仕訳をしておきます。たとえば、帳簿上の『現金』残高が 10,500 であるが、実際には手元には1万円札1枚しかないことがわかった場合、

（借）現金過不足 500 （貸）現金 500

と仕訳して、とりあえず、帳簿上の『現金』残高と、現金実残との数値を一致させておきます。

その後、もし原因が判明したら、そのとおりに仕訳します。

たとえば、この差額 500 円が、『ガス代 500 円を現金で払った際に伝票起票を忘れていたもの』だと判明したら、

（借）水道光熱費 500 （貸）現金過不足 500

と仕訳します。

逆に、実際有高の方が多かった場合を例示しておきます。

帳簿上の『現金』残高が 8,000 であるが、実際には手元には千円札 8 枚と硬貨が 450 円あることがわかった場合、

（借）現金 450 （貸）現金過不足 450

その後、不一致原因を調査した結果、切手代 50 円を現金で払った際に、仕訳の金額を誤って 500 円と起票してしまったことが判明したら

（借）現金過不足 450 （貸）通信費 450

とこのように、現金の帳簿残と実際残が異なる場合、とりあえず帳簿上の『現金』残高を実際有高に一致させるわけです。その際の仕訳の相手勘定科目として『現金過不足』を用いる、というだけです。『現金過不足』という勘定科目は、（なぜかはわかりませんが）不足のときにも過剰のときにも使われます。それさえ押さえておけば簡単ですね。

ただ、現金過不足で一番大切な論点は、決算での作業にあります。もし期末日までに不一致原因が判明しなかったら、どう仕訳したらいいのでしょうか、、、という論点です。決算整理仕訳の一つですので後述します。

【論点その3】小口現金

現金に関する3つ目の論点は『小口現金』(こぐちげんきん)です。
たとえば、営業事務所がビルの1階に入っていて、経理部は2階に入っているとします。
・営業事務所の窓口で新聞の集金係がきたのでお金を払いたい、
・営業マンが立て替えた出張旅費を精算したい、、、、などなど、営業事務所内でも現金の入出金は頻繁に起こります。とくに出金(支出)は何回も発生します。その都度ビルの2階にある経理部の出納係が1階におりてきて『その都度お金を精算して(支払って)、伝票をつくる』のは非常に面倒です。
そこで、1階の営業事務所内に、お金の支払い担当者(用度係)を置いて、その人に日々の支払をしてもらおうと考えるわけです。

- すなわち
- ①2階にいる経理部出納係はあらかじめ1階営業事務所の用度係にまとまったお金を渡しておきます。
 - ②新聞代の支払いや営業マンの旅費精算など、出金の必要が発生したら、用度係はそのまとまったお金から支払います。日々このような出金を何回も行います。
 - ③そしてある期間経過したら(たとえば1週間経過したら)、用度係は出納係に、『何のために、いくら支払ったのか、その結果お金がいくら残ったのか』を報告します。
 - ④報告を受けた出納係は、一気にそれらの仕訳をつくります。
 - ⑤出納係は、使われた分の金額を補充するため、用度係にその金額を渡します。

このまとまったお金のことを小口現金といい、“ある程度集めてから一気に仕訳する”という仕組みを採用します。
たとえば、

- ①月曜日の朝、出納係は用度係に現金 10 万円を渡します。
(借)小口現金 100,000 (貸)現金 100,000
- ②月曜日～金曜日、用度係はこの現金から様々な出金をしました。
この段階では仕訳はつくられません。

- ③翌週月曜日の朝、用度係は先週の1週間で支払ったものすべての領収書を出納係に渡しました。
- ④出納係はその内訳どおりに仕訳します。たとえば
(借)水道光熱費 3,000 (貸)小口現金 90,000
(借)旅費交通費 57,000
(借)通信費 30,000
- ⑤そして、出納係は、減った金額分の現金を用度係に渡して小口現金を補充します。
(借)小口現金 90,000 (貸)現金 90,000

小口現金という論点は以上です。

経理部（出納係）が、まとまったお金を支払担当者（用渡係）に渡しておき、しばらく放置した後に一気に仕訳して、使われた分を補充する。仕組みさえ理解していれば、小口現金の仕訳は簡単です。

（この仕組みの小口現金を、学問的にはインプレストシステムと呼びます。実務でこの言葉を聞いたことはありませんが。。。でも、小口現金自体は確かにあります。）

本チャプターはここで終了です。章末問題で知識を確認してみてください。

Q1;
電気代1万円を現金で支払ったときの仕訳は？

(借) 水道光熱費 10,000 (貸) 現金 10,000

Q2;
売掛金 1 万円を現金で回収したときの仕訳は？

(借) 現金 10,000(貸) 売掛金 10,000

Q3;
売掛金 100 円の回収として郵便為替証書を受け取ったときの仕訳は？

(借) 現金 100(貸) 売掛金 100
通貨代用証券なので『現金』扱いします。

Q4;
帳簿上の『現金』残高が 10,500 であるが、実際には手元には1万円札1枚しかないことがわかった。仕訳は？

(借) 現金過不足 500 (貸) 現金 500

Q5;

Q4 の現金過不足額 (借方残)500 円が、『ガス代 500 円を現金で払った際に仕訳するのを忘れていたもの』だと判明した。仕訳は？

(借) 水道光熱費 500 (貸) 現金過不足 500

Q6;
帳簿上の『現金』残高が 8,000 であるが、実際には手元には千円札 8 枚と硬貨が 450 円あることがわかった。仕訳は？

(借) 現金 450 (貸) 現金過不足 450

Q7;

Q6の現金過不足額 (貸方残)450 円について不一致原因を調査した結果、切手代 50 円を現金で払った際に、仕訳の金額を誤って 500 円と起票してしまったことが判明した。仕訳は？

(借) 現金過不足 450(貸) 通信費 450

以下の①～④までの連続した取引について仕訳を示してください。

Q8;

①月曜日の朝、経理部の出納係は営業事務所の用度係に現金10万円を渡した。
仕訳は？

(借) 小口現金 100,000 (貸) 現金 100,000

Q9;

②月曜日～金曜日、用度係はこの現金から必要な出金をした。内訳は、ガス代 70,000 円及び切手代 20,000 円の支払いの2件のみであった。仕訳は？

仕訳なし。
この段階では仕訳はつくられません。ひっかかりましたか？（笑）
でもこれ、重要なポイントです。

Q10;

③翌週月曜日の朝、用度係は先週の1週間で支払ったものすべての領収書（ガス代 70,000 円及び切手代 20,000 円）を出納係に渡した。仕訳は？

(借) 水道光熱費 70,000 (貸) 小口現金 90,000

(借) 通信費 20,000

なお、仕訳をつくるのは出納係です。用度係ではありません。ですので②の段階では仕訳はありません。

Q11;

④そして、出納係は、減った金額分の現金 (9 万円) を用度係に渡して小口現金を補充した。仕訳は？

(借) 小口現金 90,000(貸) 現金 90,000

CHAPTER 3 預金

日常生活では、“預金”と言えば普通預金や定期預金のことを指すことが多いと思います。簿記ではこのほかよく出てくるのが“**当座預金**”(とうざよきん)です。ATMの画面上で『当座預金』という文字を見かけたことがある方も多いとは思いますが、どんな預金なのかまではあまり知られていないかもしれません。

しかし、どんな預金なのかを知らないと、後述する小切手取引を理解することができませんので、しっかりおさえる必要があります。

その前に、まずは、預金全般に関する簡単な仕訳を例示します。仕訳を追いかけてみてください。

銀行へ行って現金 30,000 円を普通預金に預け入れた。

(借) 普通預金 30,000 (貸) 現金 30,000

現金が普通預金に姿を変えました。

銀行へ行って現金 50,000 円を当座預金に預け入れた。

(借) 当座預金 50,000 (貸) 現金 50,000

普通預金 20,000 円を定期預金に振り替えた。

(借) 定期預金 20,000 (貸) 普通預金 20,000

普通預金に利息 1,000 円がついた。

(借) 普通預金 1,000 (貸) 受取利息 1,000

手元にある 3,000 円の郵便為替証書を普通預金に預け入れた。

(借) 普通預金 3,000 (貸) 現金 3,000

(郵便為替証書は『現金』扱いでしたね。)

どうですか？これが日常的なノーマルな仕訳です。簡単ですね。

“預金”についても、やはりこれだけだと、学問的・検定試験的には何のオモシロミ也没有せん。ということで初級レベルでは、預金に関する論点は3つあります。そのためには、まず当座預金と小切手の仕組みを知っておく必要がありますので、論点といっしょに解説していきます。

【当座預金と小切手取引の仕組みと流れ】

そもそも当座預金とはどんな預金でしょうか？

銀行などで当座預金口座を開くと、小切手や手形を使えるようになります。これが当座預金の大きな特徴ですが、逆に言うと、小切手や手形を使いたいがために当座預金口座を開きます。私も経理の仕事上、小切手や手形を受け取りましたし、作成もしました。しかし当座預金口座はだれでも開設できる口座ではなく、開設するためには銀行側による審査を受けることになります。私のような個人（庶民）では断られるでしょう。

小切手は様々な支払いに使うことができますので、手元に現金をあまり持つ必要がなくなるというメリットがあります。たとえば、

- ①A商店はB商店（パソコンショップ）から、A商店の事務所で使用するためのパソコンを 20 万円で購入し、小切手に金額を記入してB商店に渡します（“小切手を振り出す”と表現します）。
- ②B商店は、その小切手を銀行窓口へ持っていくと、窓口で現金を受け取ることができます。この現金は、A商店の当座預金口座残高から引かれたものです。

このように小切手を使えるようになると、キャッシュレスでものを購入することができます。これがメリットです。アメリカなど諸外国では、従業員の給料が小切手で支払われることもありますし、一般の人でも小切手を使えるので、スーパーやガソリンスタンドでの精算を小切手ですることも珍しくありません。

一方で当然デメリットもあります。普通預金等と異なり、当座預金には利息がつきません。（ちなみにデメリットかどうかはわかりませんが、当座預金には通帳がありません。）

では、上記の小切手取引の仕訳を例示します。これは1つ目の論点です。

【論点その1】

仕訳のタイミングと勘定科目に注意！

小切手を振り出したとき、振り出した側は振り出した時点で当座預金が減少したものと考えます。つまり、さきほどの例では①の段階での仕訳で、早くも貸方に『当座預金』を記帳します（この点は下記の例示でもう一度説明します）。

一方、小切手を受け取った側は、相手から小切手を受け取った時点で『現金』をもらったものと考えます。もちろん、小切手は貨幣でも紙幣でもありませんが、これが先ほど『CHAPTER2 現金』に出てきた“通貨代用証券”の一つ“他人振出の小切手”です。すぐ現金に換金できるものだから、会計上は『現金』とするわけです（この点は下記の例示でもう一度説明します）。では、実際にさきほどの例を仕訳してみましょう。

例示

①A商店はB商店（パソコンショップ）から、A商店の事務所内で使用するためにパソコンを 20 万円で購入し、小切手に金額を記入してB商店に渡した。

A商店側の仕訳は

（借）備品 200,000（貸）当座預金 200,000

B商店側の仕訳は

（借）現金 200,000（貸）売上 200,000

注目すべきは、A商店が、小切手を振り出した時点でもう貸方に『当座預金』を記帳していること（まだ当座預金は減少していないのに！）、そしてB商店が小切手を受け取ったこの時点でもう借方に『現金』を記帳していること（まだ銀行へ行っていないのに！）です。ともに若干の“フライング感”を否めませんが、簿記ではこう経理処理します。

（私の知っているかぎり、実務では小切手を受け取ってもすぐに銀行に渡して換金してしまいますので、タイムラグはあまりないので、結局こういう仕訳になったのかな（大きな問題はないのかな）、と思います。ただ、やはりこのタイムラグは検定試験では出題しやすい論点です。『銀行勘定照合表（預金調整）』というテーマで 2 級以上で学ぶことになると思います。）

では②の仕訳はどうなるでしょうか。

②B商店は、その小切手を銀行窓口へ持っていき、現金を受け取った。この現金は、A商店の当座預金残高から引かれた。

A商店側の仕訳は『仕訳なし』（すでに帳簿上は当座預金が増加されていますので）

B商店側の仕訳は『仕訳なし』（すでに帳簿上は現金が増加していますので）

です。そうですね？もうこれ以上は仕訳しようがありませんね。

まとめ；

小切手は、仕訳するタイミングと勘定科目に注意です！そのためには、小切手取引の仕組みと流れを理解しておくことが近道です。

では、二つ目の論点です。

【論点その2】自己振出の小切手

さきほどの小切手取引は、『Aさんが小切手を振り出し、Bさんがそれを受け取って銀行へ持って行って換金する。』というものでした。
この話を以下のように若干変更します。

2つ目の論点は『Aさんが小切手を振り出し、Bさんがそれを受け取って、(その後Cさん、Dさんと渡って巡り巡って、)結局その小切手がAさんのところに戻ってきた。』というオハナシです。では例を使って解説します。(理解のため、簡素化した例にしてあります。なお、①はさきほどの例と同一です)

①A商店はB商店(パソコンショップ)から、A商店の事務所内で使用するためにパソコンを 20 万円で購入し、小切手に金額を記入してB商店に渡した。

A商店側の仕訳は

(借)備品 200,000 (貸)当座預金 200,000

B商店側の仕訳は

(借)現金 200,000 (貸)売上 200,000

ここまではいいですね。論点は次です。

②B商店は、その小切手を銀行窓口へ持っていかず、C商店への商品仕入代金 20 万円の支払いのためにC商店に渡した。

A商店側の仕訳は

仕訳なし(無関係です)

B商店側の仕訳は

(借)買掛金 200,000 (貸)現金 200,000

貸方の勘定科目に注意です。“他人振出の小切手”なので『現金』です。①で借方に『現金』としたものを②で貸方に記入しただけですね。

(ややこしくなるのでC商店側の仕訳はここでは無視します。ご了承ください。)

③C商店は、A商店からの借入金の返済のため、B商店から受け取った小切手をA商店に渡した。

A商店側の仕訳

(借)当座預金 200,000 (貸)貸付金 200,000

小切手が結局A商店に戻ってきました。借方の勘定科目に注目です。A商店は小切手を受け取ったので、借方は『現金』かと思いきや、『当座預金』です。なぜだかわかりますでしょうか？これが2つ目の論点です。

A商店は小切手を振り出したとき(①)に、貸方に『当座預金』を記帳しました。小切手を振り出したので、当座預金が減少したものとみなしたわけですが、ところが③でまさにその小切手を受け取ったわけですから、今度は借方に『当座預金』となります。減少するとみなしたことが実は減少しなかった、ということです。

『小切手を受け取ったら現金』というわけではありません。『他人振り出しの小切手を受け取ったら現金』です。自己振り出しの小切手を受け取ったら当座預金です。

(私の個人的な経験談では、自社が振り出した小切手が、巡り巡って自社に戻ってきた、なんてことは聞いたことはありません。

しかし、一旦振り出した小切手が、なんらかの事情ですぐに返却された場合(そしてとくに再発行しない場合)はたしかに上記のような処理をするのかもしれませんが。いずれにしても、検定試験のためには必要な知識ですので覚えてください。)

これが“自己振出の小切手”の流れです。

仕組みと流れを知っていれば仕訳は簡単だと思います。

あとは、検定試験で出題されたときに、その小切手は誰が振り出したものなのかに気を使えるかどうかですね。

では当座預金・小切手に関する最後の論点です。

【論点その3】当座借越(とうざかりこし)

当座預金に関しては、上記のとおり小切手取引に注目する論点が重要ですが、その他“当座借越”にも触れておきます。これは小切手自体よりも当座預金残高に着目した論点です。実際、実務でも銀行と“当座借越契約”を締結している企業も多いと思います。仕訳は簡単ですので、その前に、やはりこの『当座借越契約』なるものの仕組みを理解することが結局は仕訳をマスターする最短距離だと思っています。

通常、企業は必要な都度、銀行と借入の契約をしないと、お金を借りることはできません。しかし一時的に急ぎまとまったお金が必要になったときなどに、いちいち銀行に借入審査をしてもらって、契約書を交わして、、、としていたら煩雑ですし時間がかかってしまいます。そういう非常事態に備えて、企業は銀行と、『いざというときには(ほぼ無条件で)すぐにお金を借りることができる』という契約を予めしておくわけですね。たとえば、『1億円までであれば、いつでもすぐに借りられる』という状態にしておくわけですね。これが当座借越契約です。そしてたとえばこのケースでいう“1億円”を“枠”とか“限度額”と呼びます。そして残高がマイナスになることを当座借越と言います。銀行も商売ですので、借越状態(マイナス残高状態)になりますと、当然、その分の利息を支払う必要があります。

ここまでご理解いただきましたら、次はいよいよ仕訳です。例で示した方がわかりやすいと思いますので、例示します。たとえば、
買掛金 400,000 円の支払いのために、小切手 400,000 円を振り出した（当座預金残高は 50,000 円しかないが、予め銀行と 1,000,000 円の当座借越契約を締結している）というケースでは

(借)買掛金 400,000 (貸)当座預金 50,000
(貸)当座借越 350,000

借方の買掛金はここでは気にしないでください。ここでは貸方に注目してください。当然、この取引では当座借越状態に陥ります。そこに気がつくことが最初のポイントですね。まず預金残高 5 万円をゼロにします。そして不足分を『当座借越』という勘定科目で処理します。当座預金のマイナス残高、つまり事実上の借入です。これは5つの概念でいえば負債です。簡単ですね。

実は、この仕訳は“二勘定制”と呼ばれる処理方法です。当座借越にはもう一つ“一勘定制”と呼ばれる処理方法があります。（上記の二勘定制を理解していれば一勘定制もすぐ理解できますので本書では省略します。）

当座預金については以上です。仕訳を覚えるというよりも、まずは小切手と当座預金の仕組みを理解することが先決です。それさえ理解していれば仕訳も自ずとわかってくると思います。ですので本書ではとくに『仕組み』が見えるように解説しました。

以上、『預金』でした。

Q1;
銀行へ行って現金 30,000 円を普通預金に預け入れた。仕訳は？

(借) 普通預金 30,000 (貸) 現金 30,000

現金が普通預金に姿を変えました。

Q2;

銀行へ行って現金 50,000 円を当座預金に預け入れた。仕訳は？

(借) 当座預金 50,000 (貸) 現金 50,000

Q3;
普通預金 20,000 円を定期預金に振り替えた。仕訳は？

(借) 定期預金 20,000 (貸) 普通預金 20,000

Q4;
普通預金に利息 1,000 円がついた。仕訳は？

(借) 普通預金 1,000 (貸) 受取利息 1,000
貸方の受取利息は収益です。

Q5;
手元にある 3,000 円の郵便為替証書を普通預金に預け入れた。仕訳は？

(借) 普通預金 3,000(貸) 現金 3,000
郵便為替証書は『現金』扱いでしたね。

Q6;

以下の①及び②の連続した取引についてA商店側の仕訳を示してください。

①A商店はB商店 (パソコンショップ) から、A商店の事務所内で使用するためにパソコンを 20 万円で購入し、小切手に金額を記入してB商店に渡した。

②B商店は、その小切手を銀行窓口へ持っていき、現金を受け取った。この現金は、A商店の当座預金残高から引かれた。

①
(借) 備品 200,000 (貸) 当座預金 200,000

②仕訳なし。

以下の①及び②の連続した取引についてB商店側の仕訳を示してください。

Q7;

①A商店はB商店 (パソコンショップ) から、A商店の事務所内で使用するためにパソコンを 20 万円で購入し、小切手に金額を記入してB商店に渡した。(B商店側の仕訳)

(借) 現金 200,000 (貸) 売上 200,000

Q8;
②B商店は、その小切手を銀行窓口へ持っていき、現金を受け取った。この現金は、A商店の当座預金残高から引かれた。(B商店側の仕訳)

仕訳なし (すでに帳簿上は現金が増加しています)

まとめ；
小切手は、仕訳するタイミングと勘定科目に注意です！そのためには、小切手取引の仕組みと流れを理解しておくことが近道です。

以下の①～③の連続した取引についてA商店側の仕訳を示してください。

Q9;

①A商店はB商店 (パソコンショップ) から、A商店の事務所内で使用するためにパソコンを 20 万円で購入し、小切手に金額を記入してB商店に渡した。(A商店側の仕訳)

(借) 備品 200,000 (貸) 当座預金 200,000

Q10;

②B商店は、その小切手を銀行窓口へ持っていかず、C商店への商品仕入代金 20 万円の支払いのためにC商店に渡した。(A商店側の仕訳)

仕訳なし (無関係です)

Q11;

③C商店は、A商店からの借入金の返済のため、B商店から受け取った小切手をA商店に渡した。(A商店側の仕訳)

(借) 当座預金 200,000 (貸) 貸付金 200,000

小切手が結局A商店に戻ってきました。

借方の勘定科目に注意です。

まとめ

これが“自己振出の小切手”の流れです。

仕組みと流れを知っていれば理解は簡単だと思います。

Q12;

買掛金 400,000 円の支払いのために、小切手 400,000 円を振り出した (当座預金残高は 50,000 円しかないが、予め銀行と 1,000,000 円の当座借越契約を締結している)。仕訳は？ (二勘定制)

(借)買掛金 400,000 (貸)当座預金 50,000
(貸)当座借越 350,000

CHAPTER 4 商品売買

ここで第Ⅰ部を復習しましょう。若干遠回りしますが、ステップを踏んで順序良く解説していきますのでお付き合いください。

まずは5つの概念を復習します。

『資産の増加は借方、費用の発生は借方、負債の増加は貸方、純資産の増加は貸方、収益の発生は貸方』でしたね。

これを踏まえて簡単な仕訳を例示します。たとえば、

5,000,000 円のビルを事務所用として購入し、明け渡しも受けた。代金は小切手 2,000,000 円を振り出し、残額は月末払いのツケとした。

(借) 建物 5,000,000 (貸) 当座預金 2,000,000

(貸) 未払金 3,000,000

ここで強調したいのは、貸方の『未払金』(みばらいきん)です。

簿記・会計では、取引の対象が『商品なのかどうか』という視点がとても大切です。(第Ⅰ部でも書きましたが、簿記のテキストではこの点をもっともっと強調すべきだと思います。)

このケースでは、購入したのは“事務所用のビル”であり、“商品”ではありません。商品ではないので“未払金”という負債勘定を用います。

一方もし“商品”をツケで購入したときは“買掛金”(かいかけきん)です。ではここで、商品をツケで購入したときの仕訳を例示します。

5,000 円の商品を購入し、代金は小切手 2,000 円を振り出し、残額は月末払いのツケとした。

(借) 商品 5,000 (貸) 当座預金 2,000

(貸) 買掛金 3,000

もう一度言いますが、取引の対象が商品なので、負債の勘定科目は『未払金』ではなく『買掛金』を用います。

一方今度は借方に注目してください。『商品』は資産です。『商品』という資産が増加したので借方に記帳されます。

ではその続きを考えます。

『その商品（5,000 円で仕入れた）を、7,000 円で販売して、代金は月末回収とした』というケースの仕訳はどうなるかというと、

（借）売掛金 7,000 （貸）商品 5,000
（貸）商品売買益 2,000

です。まずは借方に注目してください。取引の対象が商品なので、『売掛金』です（もし商品でなければ『未収金』という名前の勘定科目です）。

次に貸方に注目してください。5,000 円の商品を販売したので、手元から商品がなくなりました（資産の減少）。したがって『商品』5,000 円が貸方です。また、販売価格との差額 2,000 円が収益となります。勘定科目名は『商品売買益』です。

このように、商品を仕入れたときに借方『商品』、売ったときに貸方『商品』、儲け分を貸方『商品売買益』と仕訳するのが商品売買取引の原始的な仕訳です。商品取引を『商品』と『商品売買益』に分けて記帳するので分記法（分割記入法）と呼ばれます。“5つの概念の増減”にそのまま合致した記帳方法ですね。

さて、ここでさきほどの販売の仕訳をもう一度書きます。

(借) 売掛金 7,000 (貸) 商品 5,000
(貸) 商品売買益 2,000

分記法ではこのとおり、販売したときに仕入れたときの値段を貸方に記入する必要があります(上記例では貸方の商品 5,000 円)。

その結果、『販売した時点で儲け (2,000 円) を算定できる』というメリットがあります。

商品売買というのは、それこそ毎日何十個、何万個と仕入・販売が行われるものです。商品の種類もたくさんあるでしょうし、同じ商品でも仕入れる日によって仕入値が異なることもあるでしょう。分記法では、販売したときに仕入値を貸方に記入するということは、仕入値をいちいち調べる必要があるということです。これでは非常に煩雑で、実務的ではありません。ここに分記法の限界(デメリット)があるわけです。

そこで、分記法に代わる記帳方法がいくつか考案されているのですが、簿記の勉強で一番大切なのは、『三分法』(さんぶんぽう)と呼ばれる記帳方法です。今後、ほとんどの『三分法』しか使わなくなると言っても過言ではないでしょう。

三分法では、商品を購入したときは、借方に『仕入』、販売したときは、貸方に販売価格で『売上』です。そして後述しますが、『繰越商品』という勘定科目も用います。商品取引を3つの勘定科目を用いて仕訳するので、三分法と呼ばれています。

ではここで、三分法の仕訳をさきほどの分記法とまったく同じ取引で例示します。
5,000 円の商品を購入し、代金は小切手 2,000 円を振り出し、残額は月末払いのツケとした。
(借)仕入 5,000 (貸)当座預金 2,000
 (貸)買掛金 3,000

その商品(仕入値 5,000 円)を 7,000 円で販売して、代金は月末払とした。
(借)売掛金 7,000 (貸)売上 7,000
このとおり、三分法は非常に簡便な記帳方法です。商品を買ったら『仕入』、売ったら『売上』です。
ただし、デメリットもあります。このままではいくら儲けたのかがわかりませんね。儲けを算定するのが簿記の目的の一つです。どうしたらいいのでしょうか？

答えは、『決算作業のときに算出すればいい』です。つまり、日常作業(期中)では、『仕入れたら借方仕入、売ったら貸方売上』をひたすら繰り返し、決算作業(期末)で『それまで販売した商品の原価を一気に算出する』のです(この際に『繰越商品』という勘定科目を用います)。決算整理仕訳の一つですので後述します。つまり、三分法を採用している場合には、決算において三分法用の決算整理仕訳が必要になるということです。これを覚えておいてください。

ちょっと遠回りしましたが、三分法による商品売買を解説しました。

このように簿記・会計では、取引の対象が『商品なのかどうか』という視点がとても大切です。ツケ払いの勘定科目名しかり、商品自体の記帳方法もしかり、です。三分法という記帳方法は、備品、固定資産、株式などを売買したときには用いられません。これらの売買にはあくまでも分記法が用いられます。
三分法はあくまでも商品売買のための記帳方法です。今後様々な仕訳を覚えることになりますが、混同しないために、このことを今必ず押さえておいてください。取引の対象が商品なのかどうか、です。
本書でも、商品売買に関しては、今後三分法を前提に書きます。

商品の売買であれば三分法 & 買掛金・売掛金
商品以外の売買であれば分記法 & 未払金・未収金など

【おまけ1】

コンビニやスーパーなどは、顧客が世間一般の人（**Business to Consumer ; B to C**）なので、販売するときはツケとはせずに、すぐ現金を受け取るのが通常です。

しかし、企業と企業との間で行われる取引（**Business to Business ; B to B**）は、ツケ（掛け）で行われるのが通常です。なぜでしょうか？

いろいろ考えられますが、たとえば

- ・取引回数が多いため、その都度現金を払うのは煩雑である
- ・取引金額が大きいため、その都度現金を用意するのは危険である
- ・仕入担当者や営業担当者に現金を持たせることは、危機管理・防犯の観点から問題があるなどでしょう。

私がはじめて簿記の勉強をしたのは大学1年生のときでした。今以上に世間知らずだった私は『ツケになんかしないで現金で払えば早いのに』と思っていました（^^ゞ
（実務では、ほとんどの決済は銀行振込です。現金現物で払う・受け取るなんてそんなにありません。）

【おまけ2】

分記法の『商品』は『資産』ですね。では三分法の『仕入』は5つの概念のうちどれに該当すると思いますか？

借方に記帳されているので『資産』か『費用』のどちらかだろうと考えるわけですが、検定試験用のテキストでは、『仕入』を『費用』として扱っているものも見受けられます。

しかし「それは正確ではない、『仕入』は『資産と費用の混合勘定』である」という説もあります。たしかにそれも一理あります。学問的にはそういう考え方もあるでしょう。

ただ、仮に理論上正確ではないとしても、検定試験に合格するための知識としては、『仕入は費用である』と考えておいた方が、とりあえずは説明・理解が楽なのかもしれません。私も、アカデミックに考える必要がないのであれば、『費用』と考えても差し支えがないものと思います。

（ちなみに『売上』は収益です。）

では、商品売買に関する論点はどのようなものがあるでしょうか。

期中仕訳では3つほどありますが、それぞれはそんなに難しいものではありませんので簡単に説明します。

（三分法の商品売買で一番大切な論点は、決算で行う作業です。これは決算のチャプターで説明します。）

【論点その1 付随費用】

仕入にかかった諸費用（付随費用）は、会計上、経費などの費用とはせずに、『仕入』に算入する。これが最初の論点です。なぜなら、簿記では『取得するためににかかった諸費用はそのモノの取得原価に入れる』という考え方があるからです。たとえば、
『商品 200 円を掛けて仕入れた。その際、引取手数料として 10 円払った。』であれば
(借)仕入 210 (貸)買掛金 200
(貸)現金 10

です。210 円の商品を仕入れたのと同じです。

この『ブツを買うためににかかった諸費用は、そのブツの取得原価に含める』という考え方は、今後簿記の勉強ではよく出てきますので覚えておいてください。固定資産でも有価証券でもそうです。

【論点その2 返品など】

買った商品を返品した、あるいは、売った商品を返品された場合の仕訳もおさえましょう。それぞれ、買った時の仕訳・売ったときの仕訳の逆仕訳をするだけです。たとえば

掛けで買った商品を返品したら、
(借)買掛金 ○○(貸)仕入 ○○
掛けで売った商品を返品されたら、
(借)売上 ○○(貸)売掛金 ○○

返品ではなく『値引き』の場合も同様です。ただし、『値引き』は『返品』と異なり、商品自体は動きませんので、そのことは頭の中にイメージしておいてください。

簿記の勉強が中～上級になると、返品や値引きは上記のように簡単な仕訳ではなく、複雑な処理をすることになりますので、正確な仕訳は今後みなさんが読む簿記のテキストで確認してください。ここでは、簿記ではこういう論点があるということだけご承知置きください。

【論点その3 原価・有高の算定】

商品有高や原価の算定方法には、いくつかあります。たとえば、
5月1日、単価100円の商品を10個仕入れた。
5月10日、単価120円の商品を10個仕入れた。
5月20日、商品1個を150円で販売した。
では、5月20日に販売した商品の仕入れ値はいくらだったでしょうか？

『100円』と考えるのが、先入先出法(さきいれさきだしほう)の考え方です。
先に仕入れたものから先に払い出す、と考えるわけです。
一方、『110円』と考えるのが、平均法(移動平均法)です。仕入れた都度、平均値を算出する、と考えるわけです。
その他いくつか算定方法がありますが、簿記の初級では、先入先出法と移動平均法の二つが大切です。この二つがわかれば他の計算方法も理解できると思います。

おまけ；
昔は『120円』と考える後入先出法(あといれさきだしほう)もありましたが、今は事実上ほぼ廃止されました。世の中には後入先出法の方を好む企業もあって、廃止には相当反対していたようですが。

ここで、非常に勘違いしやすい注意点を書いておきます。
この先入先出法や移動平均法などの原価算定の方法は、実際の物(ブツ)の流れとは無関係であるということです。

もう一度さきほどの例を書いて説明します。
5月1日、単価100円の商品を10個仕入れた。
5月10日、単価120円の商品を10個仕入れた。
5月20日、商品1個を150円で販売した。
この例でいえば、5月20日に販売した商品が、実際には1日に仕入れた物なのか、それとも10日に仕入れた物なのか、は経理処理とは関係ありません。商品倉庫管理者が、たとえどの商品を倉庫から出荷したとしても、経理処理とは無関係なのです。

つまり、計算方法として先入先出法を採用しているのであれば、たとえ20日に出荷した物が10日に仕入れた物だとしても、経理上は1日に仕入れた物が払いだされたものとみなして計算する、ということです。先入先出法や移動平均法などの計算は、あくまでも仮定を置いた計算にすぎません。簿記では仮定で計算をしているのです。現物の動きにピッタリ合致させて計算しているわけではありません。

検定試験には直接的にはあまり関係ないのですが、倉庫と経理の実務(棚卸など)を考える際にはけっこう重要な話ですので、知っておいてください。

本チャプターはここで終了です。では章末問題で知識を確認してみてください。

Q1;
5,000 円の商品を購入し、代金は小切手 2,000 円を振り出し、残額は月末払いのツケとした。仕訳は？（三分法。以下断りがなければ三分法とします。）

(借) 仕入 5,000 (貸) 当座預金 2,000
(貸) 買掛金 3,000

Q2;
商品 (仕入値 5,000 円) を 7,000 円で販売して、代金は月末払とした。仕訳は？

(借) 売掛金 7,000 (貸) 売上 7,000

Q3;
商品 200 円を掛けで仕入れた。その際、引取手数料として 10 円払った。仕訳は？

(借)仕入 210 (貸)買掛金 200
(貸)現金 10

210 円の商品を仕入れたのと同じです。この『ブツを買うためにかった諸費用は、そのブツの取得原価に含める』という考え方は、今後簿記の勉強ではよく出てきますので覚えておいてください。固定資産でも有価証券でもそうです。

Q4;

5 月 1 日、単価 100 円の商品を 10 個仕入れた。

5 月 10 日、単価 120 円の商品を 10 個仕入れた。

5 月 20 日、商品 1 個を 150 円で販売した。

では、5 月 20 日に販売した商品の仕入れ値はいくらか？（先入先出法）

100 円

Q5;

5 月 1 日、単価 100 円の商品を 10 個仕入れた。

5 月 10 日、単価 120 円の商品を 10 個仕入れた。

5 月 20 日、商品 1 個を 150 円で販売した。

では、5 月 20 日に販売した商品の仕入れ値はいくらか？（移動平均法）

CHAPTER 5 手形

手形には小切手と非常に似ている側面があります。

手形は、代金の支払に用いられたり、お金を貸すときの借用証書の代わりとして用いられます。

手形には 2 種類あります。約束手形と為替手形です。2 者間で用いられるのが約束手形で、3 者間で用いられるのが為替手形です。ただ、まずは手形の種類にはあまり意識せずに解説をすすめます。

以下ではまずは手形の主要な取引となる商品売買に的を絞って解説し、その後手形を用いてお金を貸し借りする取引を解説します。

『商品の売買に手形を用いる』とは、たとえば、

①A商店が商品をB商店から仕入れたとき、手形（約束手形）を作成して、B商店に渡します。

②B商店はこの手形を銀行に預けます。

③そしてたとえばこの手形が“サイト 90 日”の手形であれば、作成日から 90 日後（この期日は手形紙面上に記入されています）に入金されます。つまりA商店の預金口座から手形代金が引き落とされ（決済され）、B商店の預金口座に振り替えられます。

では、取引を例示しながら手形取引の仕訳を解説していきます。

①A商店は、B商店から商品 5,000 円を仕入れました。代金は手形(期日は 90 日後)を作成してB商店に渡しました。

A商店側の仕訳

(借)仕入 5,000 (貸)支払手形 5,000

B商店側の仕訳

(借)受取手形 5,000 (貸)売上 5,000

このとおり、A商店側の仕訳の貸方は『支払手形』です。これは、買掛金と同様負債ですが、『(買掛代金ではなく)手形額面代金を支払わなければならない』という債務を表す勘定科目です。一方、B商店側の仕訳の借方は『受取手形』です。これは、売掛金と同様資産ですが、『(売掛代金ではなく)手形額面代金を受け取ることができる』という債権を表す勘定科目です。

②B商店は手形を銀行に預けました。

仕訳は起こりません。

ちなみに、簿記のテキストではなぜかこの「銀行に手形を預けました。」というフレーズがほとんどないような気がします。手形を受け取ったら、なるべくすぐ銀行に持っていきます。実務では当然行われることで、これを『手形を取り立て依頼に出す』と言ったりします。手形を手元で大切に保有しているだけではお金は入ってきません。銀行に預けて期日に資金振替処理をしてもらうよう依頼しなければなりません。検定試験に関係ないとしても、実務での常識です。ぜひ知っておいてください。(簿記のテキストでは、“手形を相手に呈示して支払ってもらう”ような流れになっていたりしますが、、いつの時代の話??という感じがします。。)

③手形の決済期日になり無事決済となり、B商店の当座預金口座に手形代金が入金された。

A商店側の仕訳

(借)支払手形 5,000 (貸)当座預金 5,000

決済されたので負債が減ります。預金も減ります。

B商店側の仕訳

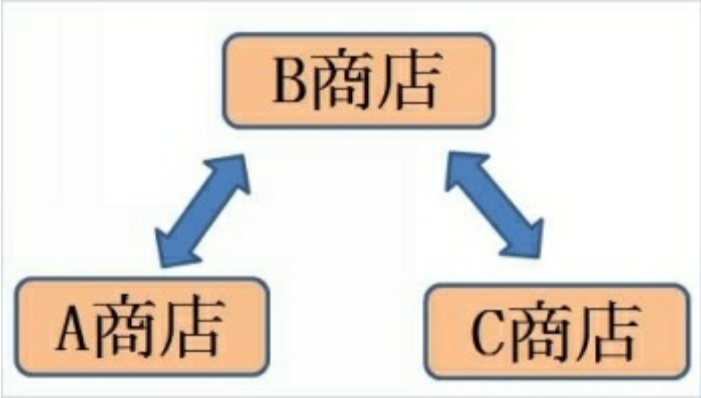
(借)当座預金 5,000 (貸)受取手形 5,000

決済されたので債権が減ります。

基本的な手形の仕組みは以上です。

仕組みがわかれば仕訳も簡単ですね。これが基本中の基本ですが、もう少し補足します。

- ①A商店はB商店から商品 3,000 円を仕入れ、代金は掛けとしました。
- ②B商店はC商店から備品 3,000 円を購入し、代金は掛けとしました。



このままであれば、A商店がB商店に買掛代金 3,000 円を払い、B商店がC商店に未払代金 3,000 円を払うことになります。

これはこれでいいのかもしれませんが、もし可能であれば、A商店からC商店に直接 3,000 円を払った方が便利ではないでしょうか。

そこで、このようなシチュエーション(三角関係)のときに使われるのが為替手形です。B商店の持っている債権と負っている債務を打ち消す(相殺:そうさい)ために行われます。B商店は、自分の債権・債務を相殺したいから為替手形を作成するわけです。すなわち

- ③B商店が為替手形を作成し、A商店に『A商店がこの手形の代金を払ってくださいね』という依頼をし、A商店の承諾(引受)を得て、為替手形をC商店に渡します。

- ④C商店は銀行へ取立依頼をして、手形期日になると、手形代金が決済されます(つまり、資金がA商店の口座からC商店の口座へ振替えられます)。

ではこの例を仕訳します。

① 1月1日、A商店はB商店から商品 3,000 円を仕入れ、代金は掛けとした。

A商店側の仕訳

(借)仕入 3,000 (貸)買掛金 3,000

B商店側の仕訳

(借)売掛金 3,000 (貸)売上 3,000

② 1月5日、B商店はC商店から備品 3,000 円を購入し、代金は掛けとした。

B商店側の仕訳

(借)備品 3,000 (貸)未払金 3,000

C商店側の仕訳

(借)売掛金 3,000 (貸)売上 3,000

③同日、B商店が為替手形を作成し、A商店に『A商店がこの手形の代金を払ってくださいね』という依頼をし、A商店の承諾(引受)を得て、為替手形をC商店に渡した。

A商店側の仕訳

(借)買掛金 3,000 (貸)支払手形 3,000

買掛債務が手形債務に変わりました。

B商店側の仕訳

(借)未払金 3,000 (貸)売掛金 3,000

債権と債務が相殺されました。

C商店側の仕訳

(借)受取手形 3,000 (貸)売掛金 3,000

売掛債権が手形債権に変わりました。

④C商店は銀行へ取立依頼をした。4月4日(手形期日)になり、手形代金が決済された(当座預金)。

A商店側の仕訳

(借)支払手形 3,000 (貸)当座預金 3,000

B商店側の仕訳

仕訳なし

C商店側の仕訳

(借)当座預金 3,000 (貸)受取手形 3,000

三者間での手形取引の仕組みと仕訳、おわかりいただけましたでしょうか？

以上のように、2者間での支払いに用いるのが約束手形です。

3者間の三角関係で用いるのが為替手形です。

工夫すれば2者間で為替手形を用いることもできます。

通常の簿記のテキストでは、約束手形・為替手形に関するオカタイ用語をオカタク説明してから仕

訳を説明します。名宛人だの、受取人だの、指図人だの。
正直、私が初めて勉強したときはややこしい用語でチンプンカンプン(というかウンザリ)でした。しかし、勉強した結果、わかったことがあります。それは、
作成された手形が約束手形であろうと為替手形であろうと、簿記ではとりあえず手形の名称は気にせず、手形額面金額をもらえる権利(債権)なのか、支払う義務(債務)なのか、という観点で考えてしまえばいいということです。

手形の種類に関係なく、どういう流通をしようと、勘定科目はあくまでも債権の立場であれば『受取手形』、債務の立場であれば『支払手形』です。そう開き直ってからじっくり手形を勉強すると理解が楽だと思います。本書ではそういうコンセプトで解説してきました。

【おまけ】
簿記の勉強をした方は
『手形は2種類ある。それは支払手形と受取手形である。』という勘違いをしがちです。本当に多い
です。手形現物はあくまでも『約束手形』と『為替手形』の2種類です。『支払手形』と『受取手形』
は、あくまでも債務と債権を表す簿記上の勘定科目名にすぎません。
この本では、そのような勘違いが起こらないよう順序を考えて書いてありますので大丈夫かと思いま
すが。。。。

なお、この勘定科目は商品売買に用いられた手形の場合の話です。備品など商品以外の購入で手形を振り出したときの債務は『営業外支払手形』という名称の勘定科目を用います。債権の場合は『営業外受取手形』勘定です。
やはり、簿記では取引の対象が商品なのかそうでないのか、という視点が大切です。

また、手形はお金を借りるときにも使われます。たとえば、A商店がB商店から1万円を借りるときに、その借用の証拠として手形をB商店に渡すわけです。その場合、勘定科目名は変わります。

A商店側の仕訳は

(借)現金 10,000 (貸)手形借入金 10,000

B商店側の仕訳は

(借)手形貸付金 10,000 (貸)現金 10,000

【手形の裏書・割引】

おそらく簿記会計における手形取引で一番大切な論点が裏書(うらがき)と割引(わりびき)です。

他人から受け取って手元にある手形は、さらに他人(第三者)へ譲り渡すこともできます。たとえば、Aさんから受け取った約束手形(額面 10 万円)を、Bさんへの買掛金(10 万円)の決済手段として譲る場合などです。このBさんへの譲渡の仕訳を例示しますと

(借)買掛金 100,000 (貸)受取手形 100,000

となります。手形代金を受け取る権利が消滅し、そして買掛債務を払う債務も消滅しました。(手形代金を受け取るのは B さんです)

これが手形の『裏書』(うらがき)です。要は手形を他人へ譲渡することです。簡単ですね。他人へ譲渡する際に、手形の裏面に記名・押印をするから『裏書』と言われているだけであって、要は譲渡なのです。

逆に、他人から裏書された手形を受け取った場合は、『受取手形』を借方に仕訳します。

次に手形の『割引』を説明します。たとえばAさんから受け取った約束手形(額面 10 万円)を、銀行へ持って行って、その場で現金に換金してもらいます(通常は、期日にならないともらえません)。手形の割引とは、手形を期日前に現金化することです。ですので、当然額面どおりの金額はもらえませんので例えば 2,000 円引かれて現金化されたとすると、

(借)現金 98,000 (貸)受取手形 100,000

(借)手形売却損 2,000

となります。この 2,000 円は取り扱い手数料や、期日までの利息の意味です(期日より早い時期にお金を受け取ったわけですから、その分の利息は当然差し引かれます)。

つまり譲渡する相手が金融機関である裏書(手形を現金化する裏書)を『割引』と呼ぶ、と考える
とわかりやすいのではないのでしょうか。

他者へ手形を譲渡するのが裏書で、その“他者”に現金化してもらうのが割引ということです。期日に手形代金を受け取れるのはともにその“他者”です。

手形の裏書・割引は以上のとおりなのですが、実は、手形が無事決済されないリスクもあります。手形の期日になったときに手形債務者の当座預金口座残高がなかった場合には決済されません。手形が決済されないことを『不渡り』と言いますが、裏書・割引をした者の帳簿に不渡りのリスクをどう仕訳に反映したらいいのか、実際に不渡りになったらどうするのか、などこれらの理論や厳密な仕訳は中～上級で学ぶことになります。また割引の際の『手形売却損』という勘定科目からわかるとおり、『割引』という行為をあたかも『売却』したかのような扱いをしています。この理論も中～上級簿記で学ぶ内容です。

3 級では非常に簡単な仕訳です。

本チャプターはここで終了です。章末問題で知識を確認してみてください。

Q1;

次の①～③の連続した取引についてA商店側の仕訳を示してください。

- ①A商店は、B商店から商品 5,000 円を仕入れた。代金は手形 (期日は 90 日後) を作成してB商店に渡した。
- ②B商店は手形を銀行に預けた。
- ③手形の決済期日になり無事決済となり、B商店の当座預金口座に手形代金が入金された。

① (借) 仕入 5,000 (貸) 支払手形 5,000

② 仕訳は起こりません。

③ (借) 支払手形 5,000 (貸) 当座預金 5,000

Q2;

次の①～③の連続した取引についてB商店側の仕訳を示してください。

- ① 1 月 1 日、A商店はB商店から商品 3,000 円を仕入れ、代金は掛けとした。
- ② 1 月 5 日、B商店はC商店から備品 3,000 円を購入し、代金は掛けとした。
- ③ 同日、B商店が為替手形を作成し、A商店に『A商店がこの手形の代金を払ってくださいね』という依頼をし、A商店の承諾 (引受) を得て、為替手形をC商店に渡した。
- ④ C 商店は銀行へ手形を預けた。その後 4 月 4 日、手形期日になり、手形代金が決済された。

① (借) 売掛金 3,000 (貸) 売上 3,000

② (借) 備品 3,000 (貸) 未払金 3,000

③ (借) 未払金 3,000 (貸) 売掛金 3,000
債権と債務が相殺されました。

④ 仕訳なし。

2 者間での支払いに用いるのが約束手形で 3 者間の三角関係で用いるのが為替手形です。工夫すれば 2 者間で為替手形を用いることもできます。
作成された手形が約束手形であろうと為替手形であろうと、簿記では、手形の名称は気にせず、要は手形額面金額をもらえる権利 (債権) なのか、支払う義務 (債務) なのか、という観点で考えます。勘定科目はあくまでも、債権の場合は『受取手形』、債務の場合は『支払手形』です。

Q3;

A商店がB商店から現金1万円を借りて、その借用の証拠として手形をB商店に渡した。(A商店側の仕訳)

(借) 現金 10,000 (貸) 手形借入金 10,000

Q4;

Cさんは、Aさんから受け取って手元にある約束手形 (額面 10 万円) を、Bさんへの買掛金 (10 万円) の決済手段として譲った。Cさん側の仕訳は？

(借) 買掛金 100,000(貸) 受取手形 100,000

手形代金を受け取る権利が消滅し、そして買掛代金を払う債務も消滅しました。これが手形の『裏書』(うらがき)です。要は手形を他人へ譲渡することです。逆に、他人から裏書された手形を受け取った場合は、『受取手形』を借方に仕訳します。

Q5;

Aさんから受け取って手元にある約束手形 (額面 10 万円) を、銀行へ持って行って、その場で現金に換金してもらった。2,000 円引かれて現金化された。仕訳は？

(借) 現金 98,000 (貸) 受取手形 100,000

(借) 手形売却損 2,000

この 2,000 円は取り扱い手数料や、期日までの利息の意味です (期日より早い時期にお金を受け取ったわけですから、その分の利息は当然差し引かれます)。

CHAPTER 6 有価証券、固定資産、その他

①有価証券の会計処理

“有価証券”とは何でしょうか？イメージ湧きますでしょうか？

有価証券とは、株式や債券（社債や国債など）のことを指します。文字通り「価値の有る証券」です。

企業は、株式や、国債や社債などの債券（債権ではありません）を購入することがあります。では何のために購入するのでしょうか？

たとえば運用目的が挙げられます。運用目的とは、たとえば株価の値上がりを期待して儲けるために上場株式を購入するわけです。購入してから比較的短期間で売却するつもりで購入するものです。証券市場に上場している株式などですが、これが一番イメージがわきやすいかもしれません。他の目的としては、他社を支配（グループ会社化、子会社化）するために他社の株式を購入することなども考えられます。

運用の目的で買ったのか、他社を支配するために買ったのか、あるいはそれ以外にも目的はあるかもしれません。簿記検定3級のテキストではあまり触れていないかもしれませんが、実は、『何のために購入するのか』によって、簿記では勘定科目も経理処理も異なるのです。このこと自体をまず知ってください。

そのうえで簿記3級でまずおさえなければならないのは、運用目的で購入する有価証券です。なお「運用目的」には大きく「短期間での時価の値上がりを期待してすぐ売却して儲ける」ケースと「保有し続けることで配当金や利金を受け取って儲ける」ケースとがありますが、簿記3級では前者を想定しています（これを「売買目的」と呼びます。以後本書では売買目的を想定して書きます）。売買目的で購入した有価証券のイメージは、株価の値上がりを期待して買った上場企業の株式です。

簡素化のため、税金や証券会社の手数料等を考慮せずに説明しますと、たとえば、
9月1日、現金でA株式会社の株式を売買目的で10株(株価100円)購入したら
(借)売買目的有価証券 1,000 (貸)現金 1,000

9月30日、上記株式の株価が120円だったので10株すべて売却して現金を受け取ったら
(借)現金 1,200 (貸)売買目的有価証券 1,000
(貸)有価証券売却益 200

となります。(商品ではないので分記法ですね。)

売買目的の有価証券は『売買目的有価証券』という勘定科目を用います。別の目的の場合、勘定科目も異なりますし、決算のときの仕訳も異なります。

また、株式を保有していると配当金(たとえば、A社の業績がよかった場合は株主に利益が分配されます。それを配当金といいます。)がもらえることがあります。たとえば配当金10円を現金で受け取ったら
(借)現金 10 (貸)受取配当金 10

です。
株式でなく債券(国債など)を保有していると利息がもらえます。たとえば利息10円を現金で受け取ったら
(借)現金 10 (貸)有価証券利息 10
(貸方は『受取利息』でも可)

です。
売買目的で購入した有価証券については、期中の会計処理はとても簡単です。有価証券取引で一番大切なのは決算(期末)での処理(仕訳)です。“時価評価”という言葉聞いたことがある方もいるかもしれませんが、期末日時点で売買目的の有価証券を保有している場合には、決算作業で時価に評価替えします。(これは決算整理仕訳の一つですので後述します。)

つまり、逆にいえば、決算日(期末日)までは、たとえ株価が上昇しても下降しても、原則としてこのまま放置するということです。簡単です。

②固定資産の会計処理

ここでもいきなり質問しますが、固定資産とは何でしょうか？

『不動産』を真っ先に挙げる方が多いのではないのでしょうか。たしかに土地や建物は固定資産ですし、代表例かもしれません。不動産以外に固定資産はありますか？

工場の機械設備や事務所の備品なども固定資産です。車も固定資産です。これら固定資産を購入したときは、該当する勘定科目を借方に仕訳します。たとえば事務所用に 10 万円のパソコンを月末払いで購入したら

(借) 備品 100,000 (貸) 未払金 100,000

です。

現金 150 万円で社用車を購入したら

(借) 車輛運搬具 1,500,000 (貸) 現金 1,500,000

です。

実は固定資産の会計処理は、このとおり期中は非常に簡単です。固定資産の会計処理で大切なのは、決算に行われる『減価償却』です。これも決算整理仕訳の一つですので後述します。

固定資産取引でもう一つ論点となるのは、固定資産を売却したときの仕訳です。これは期中の仕訳なのですが、これを理解するためには、『減価償却』を知っていないと理解できませんし、『減価償却』さえ理解すれば、売却の仕訳も理解できると思いますので、売却の仕訳は他の簿記のテキストに譲ります。

③経費の会計処理

ここでは経費関連を解説します。経費とは、電気代、ガス代、賃貸事務所の家賃、諸会費、火災保険料などの支払いです。

経費も期中はとくに論点はありません。やはり大切なのは決算での作業ですのでそれは決算作業のところで後述します。ここでは勘定科目に慣れてください。では仕訳を例示します。

電気代 10 万円を現金で支払った。
(借)水道光熱費 100,000 (貸)現金 100,000

事務所の家賃 20 万円を現金で支払った。
(借)支払家賃 200,000 (貸)現金 200,000

事務所用に付している火災保険の保険料 12 万円を現金で払った。
(借)支払保険料 120,000 (貸)現金 120,000

④商品券の会計処理

簿記の勉強で扱う商品券は、商品券をもらう側・使う側ではなく、発行する側の話です。要は百貨店側の話です。商品を渡す義務を表すので負債です。

たとえば、自社の商品券 10,000 円を現金で販売したら

(借)現金 10,000 (貸)商品券 10,000

です。ということは、この商品券をお客さんが持参してショッピングしたら、借方に『商品券』ですね。簡単ですね。

(借)商品券 10,000 (貸)売上 10,000

⑤消耗品の会計処理

消耗品とは何でしょうか？

簿記3級で学ぶ消耗品は、事務用消耗品です。イメージは、オフィスで使うために購入した文房具類です。たとえば鉛筆、消しゴム、ふせんなどです。

（このほか経理実務や簿記中～上級になると、『工場消耗品』も扱います。）

これらを購入したときには借方に仕訳するはずですよ（貸方は現金や未払金です。）借方ということは、『資産』か『費用』のどちらかのはずです。果たしてどちらでしょうか？

えんぴつ、消しゴムなどは、物理的に存在していますので『資産』のような気もしますし、一つ一つの金額が小さいから、いちいち資産に計上しないで『費用』として処理しても構わないような、、、これが消耗品の論点です。

ここではまず何を理解しておくべきかというと、消耗品を購入したときに2つの処理方法がある、ということです。

- 1) 消耗品購入時にとりあえず全額を『資産』として処理する方法
- 2) 消耗品購入時にとりあえず全額を『費用』として処理する方法

たとえば、
現金で1本10円の鉛筆を100本購入したときの仕訳は

1) 資産とする方法
(借) 消耗品 1,000 (貸) 現金 1,000

2) 費用とする方法
(借) 消耗品費 1,000 (貸) 現金 1,000

『消耗品』は資産の勘定科目で、『消耗品費』は費用の勘定科目です。ではここでもう一度質問します。消耗品は『資産』でしょうか『費用』でしょうか？

答えは、『資産』です。ただし、使用した分は『費用』とします。

購入したもののうち、使った分だけ費用にして、残っている分は資産にします。
たとえば、鉛筆を100本購入し、今年度1年間で70本使って、30本残っているというケースでは、30本分が資産、70本分が費用です。
でもこれは、決算にならないと具体的な数値はわかりませんね。つまりこの作業は決算整理事項ですので決算のチャプターで説明します。

本チャプターはここで終了です。章末問題で知識を確認してみてください。

Q1;

**9月1日、現金でA株式会社の株式を売買目的で10株(株価100円)購入した。
仕訳は？**

(借) 売買目的有価証券 1,000(貸) 現金 1,000

Q2;
保有している株式について、配当金 10 円を現金で受け取った。仕訳は？

(借) 現金 10 (貸) 受取配当金 10

Q3;
保有している国債について、利息 10 円を現金で受け取った。仕訳は？

(借) 現金 10 (貸) 有価証券利息 10
(貸方は『受取利息』でも可)

Q4;
事務所に 10 万円のパソコンを月末払いで購入した。仕訳は？

(借) 備品 100,000 (貸) 未払金 100,000

Q5;
現金 150 万円で社用車を購入した。仕訳は？

(借) 車輛運搬具 1,500,000 (貸) 現金 1,500,000

Q6;
電気代 10 万円を現金で支払った。仕訳は？

(借) 水道光熱費 100,000(貸) 現金 100,000

Q7;
事務所の家賃 20 万円を現金で支払った。仕訳は？

(借) 支払家賃 200,000(貸) 現金 200,000

Q8;
事務所に付している火災保険の保険料 12 万円を現金で払った。仕訳は？

(借) 支払保険料 120,000(貸) 現金 120,000

Q9;
自社の商品券 10,000 円を現金で販売した。仕訳は？

(借) 現金 10,000(貸) 商品券 10,000

『商品券』は負債です。商店側(百貨店側)の仕訳です。

この商品券をお客さんが持参してショッピングしたら、**借方**に『商品券』です。

(借) 商品券 10,000(貸) 売上 10,000

Q10;

現金で、1 本 10 円の鉛筆を 100 本購入した。

1) 資産とする方法の仕訳は？

2) 費用とする方法の仕訳は？

1) 資産とする方法

(借) 消耗品 1,000 (貸) 現金 1,000

2) 費用とする方法

(借) 消耗品 **費** 1,000 (貸方) 現金 1,000

CHAPTER 7 資本金

ここでは資本金について解説します。その前に質問します。
『あの会社は、資本金が 100 億円もある。』なんて言ったりしますが、これはどういう意味でしょうか？

初めに書きますが、資本金はお金ではありません。この勘違いが不思議なくらい多いです。もし資本金がお金であれば、『資本金』という勘定科目は『資産』に分類されます。しかし実際には『純資産』です。

さて、資本金とは何でしょうか？
法律的な定義は抜きにして説明しますと、
資本金とは、その企業に出資されたお金の累計金額を表す単なる数値です(※)。

(※理解のため、現物出資や減資があった場合や利益の資本組み入れなどを除いて説明しています。また払い込まれた金額全額を資本金としていることを前提としています。まずはイメージをもっていただくための解説です。)

たとえばAさんが商店を始めるために、300 万円のお金(開業資金)を用意します。この 300 万円は、用意しただけですと、まだAさんのものです。開業しなければ、Aさんは自由にそのお金を使ってもかまいません。

実際に商店を開業するときに、Aさんはこの 300 万円をその商店のものにします。というか開業すると商店のものになります。これを元入(もと入れ)といいます。

仕訳は

(借)現金 3,000,000 (貸)資本金 3,000,000

です。当然ですがこれは商店側の仕訳です。商店の経理係の立場で仕訳するわけですね。

お金に色はありませんので、この現金 300 万円はあくまでも物理的に 300 万円のまま、そして商店のお金になる前のまま、姿を変えず現金として存在しています。

ではこの元入が何を意味するのか？です。『この 300 万円は、商店のものになった』ということの意味します。もうAさんのものではなくなったのです。Aさんはこの商店のオーナーとなったわけです。現金はあくまでも商店のもので、オーナーのものではありません。たとえAさんがオーナー兼店長だとしても、です。

商店のものになったので、商店側としては仕訳を起こす必要があったわけです。

ただ通常ですと、この現金 300 万円を使って商品を仕入れたり、備品を買ったりしますので、現金自体はどんどん無くなっていくでしょう。また、仕入れた商品が売ればお金が入ってきます。

何が言いたいのかと言いますと、たとえば『資本金が 300 万円ある』というのは、その企業に物理的な意味で『資本金』という名称を付された現金が 300 万円存在しているという意味ではないということです。

あくまでも帳簿上の勘定科目『資本金』の残高が 300 万円だということだけです。『資本金』はあくまでも帳簿上の言葉なのです。

たとえば商店は、元入してもらった現金 300 万円をもとにして、商品を仕入れたり、電気代を払ったり、家賃を払ったりしますので（もちろん、これらはすべて仕訳されます）、その結果たとえば現金は 50 万円しか残っていないとします。それでも、帳簿上の項目である『資本金』の金額は 300 万円のままです。

このように、この商店の資本金は 300 万円で、それは、この商店がこれまでに受けた出資の合計金額が 300 万円だということを意味するだけで、それ以上でもそれ以下の意味でもないのです。

たとえば、さらにAさんはその商店の規模を大きくしようと思い、さらに 100 万円を用意して出資（元入）したら、

（借）現金 1,000,000 （貸）資本金 1,000,000

と仕訳します。

この 100 万円ももうAさんのものではありません。商店のものです。その結果、帳簿上の勘定科目である『資本金』の残高は 400 万円になります。追加出資分の 100 万円は、商品の仕入や陳列棚の購入に使われ、すぐなくなるでしょう。つまり、資本金が 400 万円あっても、手元に 400 万円現金があるという意味ではありません。

貸借対照表の純資産の部に資本金を記載しなければならないのですが、たとえば『資本金 4,000,000 円』と書かれていたりすると、『この企業には資本金という名で蓄えているお金が 400 万円ある』と思う人が少なくないそうです。中小企業の経営者に少なくないとか。。。極端な話、資本金が 100 億円の企業であっても、手元現金預金はまったくないこともありうるわけです。

『資本金』の金額は、その企業の規模を測る一つの指標にすぎない、貸借対照表の貸方に記載されている単なる数値と思ってください。

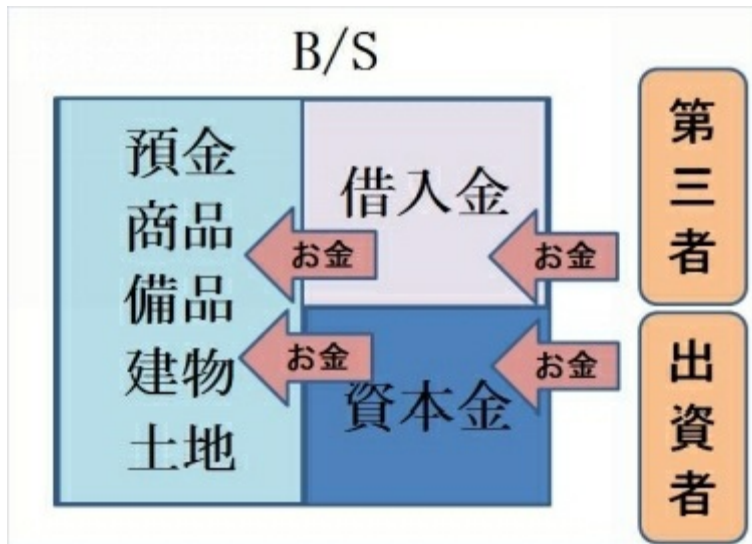
さて、資本金についてだいたいのイメージがついたと思いますので、ここで、他の勘定科目と結び付けて、貸借対照表の概観を説明します。

以上のとおり、資本金は、その企業のオーナーから出資されたオカネの金額を表します。

また負債は、(一般論としては)第三者から借りたオカネの金額を表します。

そして資産は、それらのオカネをどう使ったかを表しています。

つまり、貸借対照表 (B/S) の貸方は、その企業に入ってきたお金の源泉をあらわし、借方はその用途を表しています。



なお、企業におけるお金の大きな流れは、①第三者や出資者にお金を注入してもらい、②そのお金をもとに商品その他を購入し、③商品を販売して、④その代金を回収し、⑤第三者へお金を返済したり出資者に配当金を払う、となっています。

本チャプターはここで終了です。章末問題で知識を確認してみてください。

Q1;

Aさんは、300 万円を元入して商店を開業した（商店の当座預金に預け入れた）。
（商店側の）仕訳は？

(借) 当座預金 3,000,000(貸) 資本金 3,000,000

チャプター8 決算の具体的な作業

ここまでは日常（期中）におこる仕訳のオハナシでした。では「決算になった。」ら何をすればいいのでしょうか？

決算の全体像を説明する前に、まずは試算表（しさんひょう）について説明します。その後、決算の全体的な流れを説明します。

【試算表について】

試算表は、ある時点までに起こされた仕訳を集計したものです。一枚の表ですが、中身は、借方には資産及び費用の勘定科目が集計されていて、貸方には負債、純資産及び収益の勘定科目が集計されています。それまでの仕訳を集計しただけのものですから、当然貸借それぞれの合計金額は一致しています。

試算表	
<div> 資産の部 <div> 現金・預金 売掛金 商品 備品 建物 土地 </div> </div>	<div> 負債の部 <div> 借入金 社債 </div> </div>
	<div> 純資産の部 <div> 資本金 </div> </div>
<div> 費用 <div> 水道光熱費 旅費交通費 </div> </div>	<div> 収益 <div> 売上高 受取配当金 </div> </div>

上部は貸借対照表の基となり、下部は損益計算書の基となります。
 たとえば、4月1日に商店が開業したとして、それから10日間商売したら、10日間毎日何件も仕訳が起こされているはずです。その、4月10日までの仕訳を集計（合計）して勘定科目ごとに一覧表にしたものが、4月10日時点の試算表です。
 つまり、試算表は、集計しさえすれば、いつの時点でも作成することができます。とくに実務では毎月末や決算時に作成されます。
 ちなみに試算表は英語で **Trial Balance(T/B)** といい、ティービーと呼ばれます。

【決算の全体的な流れ】

では決算の全体的な流れを説明します。とくに簿記検定を意識して説明します。
 期中（4月1日から3月31日）は上記チャプター1～7までで説明したように、経理部では日々仕訳を作成し、仕訳を帳簿へ記帳していきます。決算の話は期末日の翌日4月1日になったとこ

ろから始まります。以下の決算作業は4月1日(以降)に行われるものです。
繰り返しになりますが、期中は日々たくさんの仕訳(期中仕訳)がおこります。しかし必要な仕訳は期中仕訳だけではなく、1年に1度決算のときにしか作成されない仕訳もたくさんあります。この「決算のときにしか作成されない仕訳」を決算整理仕訳と呼びます。

つまり、期中仕訳 + 決算整理仕訳 が1年間の仕訳すべてです。2段構えになっているイメージです。

見方をちょっと変えますと、
「4月1日から3月31日までの期中仕訳を集計した試算表」に、決算整理仕訳を反映させれば、“最終的な試算表”になります。
その“最終的な試算表”から貸借対照表(B/S)と損益計算書(P/L)を作成します。

ちょっとくどいかもしれませんが、以上をまとめますと

- ① 4月1日～3月31日までの期中仕訳を集計して、いったん試算表を作成します。なお、この試算表は『決算整理前試算表』(前 T/B)と呼ばれます。
- ② 決算整理仕訳をつくります。
- ③ 「前 T/B」に決算整理仕訳を反映させて、最終的な試算表を作成します。この試算表は『決算整理後試算表』(後 T/B)と呼ばれます。ここで利益を算定します。
- ④ 「後 T/B」から貸借対照表と損益計算書を作成します。

経理実務では通常、毎月末時点で試算表を作成します。検定試験でも、期末日時点ではなく月末時点の試算表が出てくることがあります。

検定試験ではすでに前 T/B が作成された状態から決算の問題がスタートすることが多いように思います。①の『前 T/B』がすでに完成していて、受験者には②の『決算整理仕訳』を作成させて、さらに③『後 T/B』を作成させたりします。

では、②の決算整理仕訳には何があるのか、ですが簿記 3 級でマスターしなければならない主要な決算整理事項は以下のとおりです；

- ・『現金過不足』の処理
- ・消耗品・消耗品費の処理
- ・費用・収益の見越し・繰延べ
- ・固定資産の減価償却
- ・貸倒引当金の設定
- ・有価証券の評価
- ・商品売上原価の算定（三分法の決算整理仕訳）

これらすべての事項について仕訳（決算整理仕訳）を作成します。すべて大切ですので是非マスターしてください。ちなみに 2 級、1 級になるとさらに増え、複雑になります。（とくに 3 級では、決算整理仕訳には決まった順番はないように思います。すべてマスターしてください。）

では下記より、これらの決算整理仕訳を解説します。

CHAPTER 9 決算整理仕訳 1/3

・『現金過不足』の処理

CHAPTER 2 で触れましたが、帳簿上の『現金』残高と、実際の現金有高とが一致せずに、現金の過不足が生じた場合には、とりあえず『現金過不足』という名前の勘定科目を用いてその場をしのぎました。その後不一致の原因が判明すればそのとおりに仕訳をするだけでした。

期中の仕訳を復習してみましょう。

帳簿上の『現金』残高が 10,500 であるが、実際には手元には1万円札1枚しかないことがわかった場合、

(借)現金過不足 500 (貸)現金 500

と仕訳して、とりあえず、帳簿上の『現金』残高と、現金実残との数値を一致させておきます。

その後、もし原因が判明したら、そのとおりに仕訳します。

たとえば、この差額 500 円が、『ガス代 500 円を現金で払った際に伝票起票を忘れていたもの』だと判明したら、

(借)水道光熱費 500 (貸)現金過不足 500

と仕訳します。

この場合、『現金過不足』という勘定科目は、借方 500 円、貸方 500 円なので、結果として残高は 0 円です。

では、原因調査したけれども、わからなかった場合はどうなるのでしょうか？

つまり『現金過不足』が借方残高 500 のまま期末になり、決算を迎えてしまったらどうしたらいいのでしょうか？ いつまでも永久に、現金過不足勘定として将来に繰り越していくのでしょうか？

答えは No です。実にシンプル、雑益・雑損(もしくは雑収入・雑損失)にしてしまう、です。

つまり、決算になっても過不足額の原因がわからない不明差額は、当期で終わりにしてしまいうのです。『現金過不足』勘定をゼロにします。不明なものは決算で切り捨てる！ わけです。

たとえば、

帳簿上の『現金』残高が 10,500 であるが、実際には手元には1万円札1枚しかないことがわかった場合、期中では

(借)現金過不足 500 (貸)現金 500

と仕訳して、とりあえず、帳簿上の『現金』残高と、現金実残との数値を一致させておきました。

その後、結局差額不明のまま決算を迎えてしまい、未だに原因がわからない場合、

(借)雑損 500 (貸)現金過不足 500

という決算整理仕訳を作成します。

これで、『現金過不足』勘定は、借方 500 円、貸方 500 円で、正味ゼロになりました。

残高が逆の場合は、借方が現金過不足で貸方が雑益です。

『現金過不足』の決算整理の説明は以上です。簡単ですね。

・消耗品・消耗品費の処理

チャプター 6 で説明しましたとおり、消耗品を購入したときに2つの処理方法があります。(これは期中に作成する仕訳の話です)

- 1) 消耗品購入時にとりあえず全額を『資産』として処理する方法
- 2) 消耗品購入時にとりあえず全額を『費用』として処理する方法

たとえば、
現金で、1 本 10 円の鉛筆を 100 本購入したときの仕訳は

- 1) 資産とする方法
(借) 消耗品 1,000 (貸) 現金 1,000
- 2) 費用とする方法
(借) 消耗品費 1,000 (貸方) 現金 1,000

『消耗品』は資産の勘定科目で、『消耗品費』は費用の勘定科目です。ではここでもう一度質問します。消耗品は『資産』でしょうか『費用』でしょうか？

答えは、『資産』です。ただし、使用した分は『費用』とします。

つまり、購入したもののうち、使った分だけ費用にして、残っている分は資産にします。
たとえば、鉛筆を 100 本購入し、今年度 1 年間で 70 本使って、30 本残っているというケースでは、30 本分が資産、70 本分が費用です。
でもこれは、決算にならないと具体的な数値はわかりませんね。つまりこの作業は決算整理事項です。

とチャプター 6 で書きました。では消耗品に関する決算整理仕訳を説明します。

現金で、1本10円の鉛筆を100本購入したときの仕訳を

1) 資産とする方法を採用しているときは、期中に

(借) 消耗品 1,000 (貸) 現金 1,000

と仕訳していますので、決算整理仕訳としては

(借) 消耗品費 700 (貸) 消耗品 700

を作成します。

2) 費用とする方法を採用しているときは、期中に

(借) 消耗品費 1,000 (貸) 現金 1,000

と仕訳していますので、決算整理仕訳としては

(借) 消耗品 300 (貸) 消耗品費 300

を作成します。

どちらの方法でも結果が同じになるのはおわかりになりますでしょうか？

結果として、消耗品(資産)は300残り、消耗品費(費用)は700です。

1,000円分購入したけれども、使った700円分は費用として消えて、残った300円分が資産として残りました。

消耗品に関する決算整理仕訳は以上です。

本チャプターはここで終了です。本チャプターの内容は、たくさんある決算整理仕訳のうちのほんの一部にすぎませんが、ここでいったん本チャプターでインプットした内容を章末問題で確認してみてください。

Q1;
帳簿上の『現金』残高が 10,500 であるが、実際には手元には1万円札1枚しかないことがわかり、期中では
(借)現金過不足 500 (貸)現金 500
と仕訳しておいた。その後、結局差額不明のまま決算を迎えてしまい、未だに原因がわからない。必要な決算整理仕訳は？

(借) 雑損 500 (貸) 現金過不足 500

これで、『現金過不足』勘定は、借方 500 円、貸方 500 円で、正味ゼロになりました。

Q2;

現金で、1 本 10 円の鉛筆を 100 本購入したとき、

(借) 消耗品 1,000 (貸) 現金 1,000

と仕訳していた。今年度 1 年間で 70 本使って、期末時点で 30 本残っている。必要な決算整理仕訳は？

(借) 消耗品費 700 (貸) 消耗品 700

Q3;

現金で、1 本 10 円の鉛筆を 100 本購入したとき、

(借) 消耗品費 1,000 (貸) 現金 1,000

と仕訳していた。今年度 1 年間で 70 本使って、期末時点で 30 本残っている。必要な決算整理仕訳は？

(借) 消耗品 300 (貸) 消耗品費 300

CHAPTER 10 決算整理仕訳 2/3

・費用・収益の見越し・繰延べ

ここでも決算ではなく、いったん期中の話に戻ります。会計期間は4月1日から3月31日とします。たとえば、

5月1日に火災保険料120円を現金で支払ったら

(借)支払保険料120 (貸)現金120

と仕訳されます。(注;これはあくまでも5月1日に行う仕訳です)

ちなみに『支払保険料』は費用の勘定科目です。

ここまでの説明ではこれでよかったのですが、、、実は、このままでいいかどうかは、情報が少ないので判断できません。

では、以下のような下線部分の情報を付け加えたら、いかがでしょうか。

5月1日に、この先1年分の火災保険料120円を現金で払った。

5月1日の仕訳はさきほどと同じで

(借)支払保険料120 (貸)現金120

と仕訳したとします。

さて、このままでいいでしょうか?何か決算で仕訳しないといけない気がしませんか?

実は、決算整理仕訳として以下の仕訳をする必要があります。

(借)前払保険料10 (貸)支払保険料10

なぜでしょう?というかこれは何でしょうか?

これは、当期に負担すべき費用(計上すべき費用)は120円ではなく110円だから修正している仕訳です。10円分は来期に負担すべき費用です。

会計期間は4月1日から翌年3月31日ですので、保険でカバーしている期間(5月1日から翌年4月30日まで)とは1ヶ月ズレがあります。よって、期末日3月31日時点では1ヶ月分が前払状態です。この事実を仕訳できちんと表現しないといけないのです。

この決算整理仕訳を行うことによって、当期は $120円 - 10円 = 110円$ の費用計上ですみます。なお『前払保険料(まえばらいほけんりょう)』は資産の勘定科目です。3月31日時点では10円が前払状態であり、これは『もうお金を払ってしまっていて、将来保険でカバーされる期間がある(がまだ到来していない)』という状態を表現しています。

この考え方は、前払費用だけではなく、たとえば前受収益(まえうけしゅうえき)もありますし、逆に未払費用、未収収益もあります。4パターンあるわけです。これは簿記のテキストでは『費用・収益の見越し・繰り延べ』というようなタイトルで説明されていることが多いと思います。最初は難しいと思います。私個人も最初はナカナカ区別がつかなかった思い出があります。

個人的な経験を踏まえての意見ですが、「見越し」も「繰り延べ」も、この言葉自体を覚えてもあま

り意味がなく、言ってしまうと「それが見越しなのか繰り延べなのか」はどうでもよくて、つまりは、『当期に負担すべき費用・当期にもらえるべき収益はいくらのはずだったのか』に注目して考えれば自ずと答えを導き出せると思います。「これは見越しかな？繰り延べかな？」と考える必要はないように思います。

これら4つをできる限りやさしくかつコンパクトに説明しますが、以下の説明文でイメージがわくでしょうか？

前払費用（資産）；

すでに代金を支払ったが、その恩恵（用役：ようえきといいます）をまだ受けていないケースです。たとえば、将来1年分の家賃を前もって払ったテナント側の仕訳です（あるいは単に毎月家賃を前払いしているケースでのテナント側の仕訳）。

お金を払ったときに全額を費用として計上してしまっているので、決算時点での未経過分を前払勘定に振り替えます（当期に計上した費用の一部は当期に負担する費用ではないため減少させる）。前払分は、将来その分の用役を受けることができる権利（家賃であれば、前払した分だけそこに住むことができる権利）ですので、資産です。

ですので借方は前払勘定で貸方は費用勘定です。

前受収益（負債）；

すでに代金を受け取ったが、その分の用役をまだ与えていないなどのケースです。たとえば、将来1年分の家賃収入を前もって受け取った大家側の仕訳です（あるいは単に毎月家賃を前払いしているケースでの大家さん側の仕訳）。受け取ったときに全額を収益として計上してしまっているので、決算時点での未経過分を前受勘定に振り替えます。

ですので借方は収益勘定で貸方は前受収益勘定です。大家さんは、前払された分、テナントに用役を提供（不動産物件を提供）しなければなりません。

未払費用（負債）；

すでに用役を受けたが、まだその代金を払っていないなどのケースです。たとえば、家賃を後払にしているケースのテナント側の仕訳です。まだお金を払っていないので期中に何の仕訳もしていませんので、決算時点での経過分を未払勘定として計上します。

ですので借方は費用勘定で貸方は未払勘定です。

未収収益（資産）；

すでに用役を与えたが、まだ代金を受け取っていないケースです。たとえば、家賃を後払にしているケースの大家さん側の仕訳です。まだお金を受け取っていないので期中に何の仕訳もしていませんので、決算時点での経過分を未収勘定として計上します。

ですので借方は未収勘定で貸方は収益勘定です。

【ちょっと難しいですが重要です！】

なぜこのように、収益・費用の計上と現金の入出金とが一致していないのか？不思議ではありませんか？現金をもらったら収益勘定を計上し、支払ったら費用勘定を計上するだけでいいのではないか？と思うかもしれませんが。

これは現在の会計学が『発生主義』という考え方を採用しているからです。対照的に言えば、『現金主義』を採用していないからです。

発生主義はなにも前払・未払等のハナシだけではなく、簿記は常に発生主義です（通常の企業では）。これまでも発生主義の仕訳がありました。たとえば

商品を買ったときの仕訳です。

（借）売掛金 （貸）売上

この仕訳でわかるように、現金を受け取っていないにもかかわらず、収益（売上）を計上しています。これはまさに発生主義ならではの仕訳です。発生主義は、お金の動きで収益・費用を計上するのではなく、権利・義務の発生事実が確定した時点などで費用・収益を計上します。

後述する減価償却も貸倒引当金も、発生主義という考え方を採用しているから必要になる仕訳です。

したがってその結果損益計算書で算出される利益は、儲かったお金を表しているわけではなく、『収益力』という抽象的なチカラを表しています。変な感じがするかもしれませんが、お金とは直接的には関係ないのです。

まだ難しいかもしれませんが、現時点では、現在の簿記会計は、お金の動きと収益・費用の計上は一致しているものではない、ということをご理解ください。

※費用は発生主義に基づいて計上しますが、厳密には、収益は発生主義の考えに加え、さらに貨幣・売掛金・手形などを獲得したことをもって計上します。これを実現主義といいます。中～上級で学習します。

・固定資産の減価償却

固定資産を購入したときの仕訳はチャプター 6 で説明しました。借方に固定資産の勘定科目を仕訳するだけです。たとえば 10 万円のパソコンを現金で購入したときは

(借) 備品 100,000 (貸) 現金 100,000

です。よってこのパソコンの帳簿上の値段(簿価といいます)は 10 万円です。では、このパソコンは、その企業にとって永久に 10 万円の価値があるのでしょうか？

そんなことはないはずです。ですので、帳簿上の価値(簿価)を減少させます。それを決算で行います(決算整理仕訳)。

たとえば、『この 10 万円のパソコンは 5 年で使い果たす(耐用年数が 5 年である)』と見積もったとします。すると単純計算で、1 年あたり 2 万円分の価値を使うことになります。帳簿上の価値(簿価)がその分減ります。

見方を変えると、仕訳をして帳簿上の価値を 1 年あたり 2 万円ずつ減少させるわけです。これを減価償却(げんかしょうきやく)といいます。“原価”ではなく“減価”です。

1 年目の決算では

(借) 減価償却費 20,000 (貸) 備品 20,000

と仕訳します。これが減価償却の仕訳です。

これで『備品』の簿価は 100,000 円 - 20,000 円 = 80,000 円になりました。2 年目以降も同様の仕訳をします。

減価償却の仕訳は、原則として、保有している固定資産すべてについて各々行います。固定資産が多いとその分減価償却の仕訳も多くなります。

上記例では、簡素化したため、5 年後に簿価を 0 にする(5 年後に簿価が 0 になる)という前提でしたが、たとえば 5 年後の価値は 0 でなく 1 万円であると見積もった場合、1 年あたりの減価償却費は $(100,000 - 10,000) \div 5 = 18,000$ となります(簿価が 1 万円になるまで毎年減価償却します)。

(これらの見積もりは、自由に決めていいというものではありません。また、正確な見積もりをしようとしても実際問題、困難極まるはず。検定試験でこれらの数値を見積もらせるような問題はまず出題されないでしょうし、実務では、法人税法で細かく決められている年数をもとに処理することも多いです。検定試験対策としては、まずは減価償却の計算と仕訳ができるようにしてください。)

なお、減価償却にも記帳方法が 2 種類あって、上記の仕訳は直接法と呼ばれる記帳方法です。直接法の方が最初はイメージがわかりやすいので直接法で説明しました。しかし主に用いられるのは、以下のような間接法です。

(借) 減価償却費 20,000 (貸) 減価償却累計額 20,000

貸方の勘定科目として、対象となる資産を仕訳するのではなく、このように減価償却累計額という勘定科目を用いる記帳方法です。

間接法の場合、簿価を知るためには、買ったときの値段(100,000 円)から減価償却累

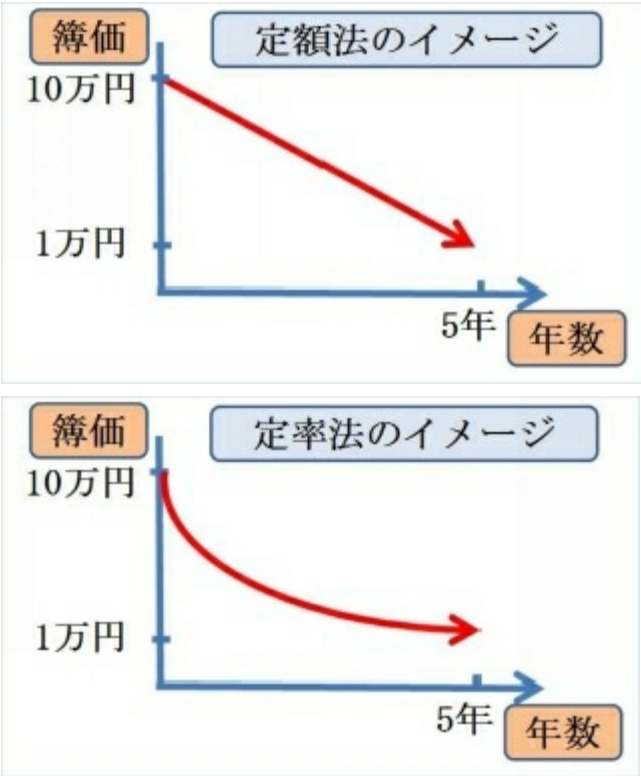
計額 (20,000 円) を差し引かないといけませんが、このやり方が一般的です。

(※「減価償却累計額」は負債ではなくマイナスの資産です。しかし入門段階では負債であると考えておいて差し支えないと思います。)

ここでは、減価償却のイメージをもってもらうために、あえて簡素化した取引を例示しました。なんとなくわかっていただけましたでしょうか？ 以下ではもう少し追加説明します。

上記の例では、『5年にわたって毎年2万円ずつ減少する』という前提で説明しました。これは『定額法』と呼ばれる計算です。
減価償却の計算方法には他にもいくつかありますが、定額法と並んで重要なのは『定率法』です。定額法は、簿価の減少の仕方が一定であるとする計算方法ですが、定率法は初期の段階での減価が早く、終盤はゆっくり減価する、という仮定で計算するものです。（もちろん、どのくらい早いペースで減価するのかなんて、誰にもわかりません。簿記では“仮定”で計算します。）

以下に、「10万円で買って、5年間で1万円の簿価にする」という場合の定額法と定率法の減価のスピードの違いを図にしてみます。



定率法の計算式の説明は簿記のテキストに譲りますが、ここではこの表のイメージを持っておいてください。簿価の減り方のスピードが異なるわけです（5年間トータルで行う減価償却費の合計は、定額法と定率法とでは同額9万円です）。

以上から、減価償却には、記帳方法には直接法と間接法の2種類あり、計算方法には定額法、定率法などいくつかある、ということを説明しました。これらを踏まえて上記のような決算整理仕訳を作っていきます。

と、建物や備品は以上のように減価償却を行います。固定資産の中でも土地に関しては減価償却をしません。ずっと使い続けるという前提だからです。

なお、減価償却は時価評価とは異なります。時価評価ではありませんし、固定資産については(原則として)時価評価をしません。固定資産は、耐用年数まで使用し続けることを暗に意図しています。値上がりを期待して購入するものではありませんので時価評価しません。
たとえば、10 万円で購入したパソコンが、その後人気モデルとなったために、パソコンショップでは 12 万円で売られるようになったとしても、経理上は何の関係もありません。

(ただし、中～上級になると、古いモデルになって陳腐化してしまった、という類の論点が出てきますし、減損という会計処理も勉強します。)

※ここまで読んでいただいて「いまさら」なのですが、実は簿記 3 級の減価償却は定額法のみが出題されます。ほんのちょっと前までは、減価償却といえば定額法と定率法が当たり前のようにツートップだったのですが、、、時代が変わりました。自分が古い人間になったようで、ちょっと悲しい気がします、、、。
(ただし、経理実務では定率法も当たり前のように行われている方法ですので、是非知っておいてください。)

・貸倒引当金の設定

突然ですが質問します。
ヒトにお金を貸したら、必ず返してもらえるでしょうか？
ツケで商品を売ったら、必ず代金を回収できるでしょうか？

ビジネスの世界では(も？)、残念ながら答えは NO です。相手が倒産する可能性があります。夜逃げする可能性もあります。
この『貸したカネが返ってこない』『ツケ代金が回収できない』ことを貸倒(かしだおれ)といいます。

では、貸倒になる可能性は何%でしょうか？
という確率論は中～上級のオハナシで、ここでは所与のものとして扱います。
たとえば「過去の経験から、ツケ代金は 3 %の確率で回収できない」と予測できたとします。すると簿記会計では、3 %はもう回収できないものとして考えます。『全体の 3 %は回収できないものなんだ』と割り切るわけです。
たとえば、期末日時点で売掛金残高が 10,000 円あったとしたら、そのうち 300 円は回収できないものと考えます。その心の準備を、帳簿上にも決算整理仕訳として表現します。
(借)貸倒引当金繰入 300 (貸)貸倒引当金 300

です。これが貸倒の仕訳です。
貸方の勘定科目は負債で「かしだおれひきあてきん」と読みます。負債の勘定科目です。“貸倒になるものとして考えている金額”を表します。
一方借方は「かしだおれひきあてきんくりいれ」と読みます。わかりづらいかもしれませんが費用です。回収できないと見積もった金額を費用としてしまうわけです。まだ貸倒の事実(相手の倒産など)は生じていません。それでも、この段階で費用を計上してしまうのです。

(※「貸倒引当金」は減価償却累計額と同様マイナスの資産ですが、入門段階では負債であると考えておいて差支えないと思います。)

なお、貸倒引当金の処理方法には2つ(差額補充法と洗替法)ありますが、それをここで説明すると貸倒の全体像がわかりづらくなるので割愛させていただきます(どちらも簡単ですのでご心配いりません)。
貸倒引当金の決算整理仕訳は以上です。

それよりも、以下の論点が重要です。

【注意！大切な論点です！がこれは期中の仕訳のオハナシです。決算整理仕訳ではありませんが、決算整理仕訳を知らないと理解できない論点ですのでここで説明します。】

期中に実際に貸倒が生じたときは、当期にツケで売った分の売掛金と、前期以前にツケで売った分の売掛金は区別します！

なぜなら、前期以前に売った分の売掛金については、前期末に貸倒引当金の対象となっているはずだからです（前期末にも貸倒引当金の決算整理仕訳をしたはずですので）。当期に売った分の売掛金は、期末日になっていない限りまだ貸倒引当金の対象とはなっていません。以下で例示します。（会計期間は 4 月 1 日から 3 月 31 日とします）

1) 当期に販売した分の売掛金が貸倒となったケース

9 月 1 日、A 商店に、売値 100 円の商品を掛けて販売した。

（借）売掛金 100 （貸）売上 100

2 月 28 日、上記売掛先の A 商店が倒産し売掛金を回収できないことがわかった。

（借）貸倒損失 100 （貸）売掛金 100

借方『貸倒損失』は費用です。ツケ代金を回収できないとわかったので、Loss となります。そして売掛金がなくなるので貸方に売掛金を仕訳します。

2) 前期以前に販売した分の売掛金が貸倒となったケース

9 月 1 日、A 商店に、売値 100 円の商品を掛けて販売した。

（借）売掛金 100 （貸）売上 100

翌年度の 4 月 30 日、上記売掛先の A 商店が倒産し売掛金を回収できないことがわかった。

（借）●●● 100 （貸）売掛金 100

さて、借方の勘定科目は何でしょうか？

『貸倒損失』ではありません。『貸倒引当金』です。なぜなら、前期末時点（3 月 31 日時点）で、決算整理仕訳として

（借）貸倒引当金繰入 （貸）貸倒引当金

という仕訳をしていたはずであり、9 月 1 日発生の売掛金は、この貸倒引当金の対象となっていたからです。借方の『貸倒引当金繰入』は費用の勘定科目です。費用の計上は前期末で済ませているということです。

前期末では、たとえば

（借）貸倒引当金繰入 300 （貸）貸倒引当金 300

と仕訳していたはずですが、前年 9 月 1 日発生の売掛金については、前期末にもう貸倒の準備をしていたのです。前期に費用処理してあります。ですので、当期に実際に貸倒となっても、当期の費用にはしません。もう費用にする必要がないのです。そこで借方には、貸倒に備えていた『貸倒引当金』（負債）が仕訳されます。

本チャプターはちょっと内容が濃かったかもしれませんが、でも 3 級の決算整理仕訳では最重要項目と言っても過言ではありません。おわかりいただけましたでしょうか？ 章末問題で確認してみてください。

Q1;

**5 月 1 日に、この先 1 年分の火災保険料 120 円を現金で払った。このとき仕訳を
(借) 支払保険料 120(貸) 現金 120
と仕訳した。必要な決算整理仕訳は？(期末日は 3 月 31 日)**

(借) 前払保険料 10(貸) 支払保険料 10

Q2;

A社は賃貸ビルを所有し、テナントに貸している。

決算になった時点で (期末日は 3 月 31 日)、翌月 1 ヶ月分 (4 月分) の家賃 5 万円を前払されている (家賃を受け取ったときに受取家賃を計上した)。必要な決算整理仕訳は？

(借) 受取家賃 50,000 (貸) 前受家賃 50,000
前受家賃は負債です。

Q3;
4 月 1 日に 11 万円のパソコンを購入した。このとき

(借) 備品 110,000(貸) 現金 110,000

と仕訳した。そのまま1年が経過し決算となった(決算日は3月31日)。『このパソコンは購入から5年間使う』と見積もり、また『購入から5年経過後の価値は1万円である』と見積もった。必要な決算整理仕訳は？(定額法、間接法)

(借) 減価償却費 20,000 (貸) 減価償却累計額 20,000

【定額法について】

11 万円－ 1 万円＝ 10 万円。

この 10 万円を 5 年かけて費用にしていきます。

10 万円÷5 年＝2 万円 / 年

【間接法について】

貸方を『備品』とする方法は直接法です。直接法の方がイメージしやすいとは思いますが、間接法の方が一般的です。

Q4;
初年度の期末日時点で売掛金残高が 10,000 円あるが、そのうち 3% は回収できないものと見積もった。必要な決算整理仕訳は？

(借) 貸倒引当金繰入 300 (貸) 貸倒引当金 300

借方の『貸倒引当金繰入』(かしだおれひきあてきんくりいれ)は費用です。つまり、見積もった決算時点で費用を計上してしまいます(まだ貸し倒れていないのに、です)。貸方の『貸倒引当金』(かしだおれひきあてきん)は負債です。

考え方としては、まず貸方に『貸倒引当金』を書いて、その後、相手勘定である『貸倒引当金繰入』を借方に書く、です。この Q4 では「初年度」としているため関係ありませんが、2 年目以降の決算整理仕訳の記帳方法には「差額補充法」と「洗替法」という 2 種類があります。とくに差額補充法では貸倒引当金の金額に注目して仕訳していきます。

Q5;

×1年9月1日、A商店に、売値 100 円の商品を掛けで販売した。

×2年2月28日、A商店が倒産し売掛金を回収できないことがわかった。決算日は3月31日である。×2年2月28日の仕訳は？

(借) 貸倒損失 100(貸) 売掛金 100

借方『貸倒損失』は費用です。ツケ代金を回収できないとわかったので、Lossとなります。そして売掛金がなくなるので貸方に売掛金を仕訳します。

Q6;

3 月 1 日、A 商店に、売値 100 円の商品を掛けで販売した。

4 月 30 日、上記売掛先の A 商店が倒産し売掛金を回収できないことがわかった。

(期末日は 3 月 31 日)

4 月 30 日の仕訳は？

(借) 貸倒引当金 100 (貸) 売掛金 100

『貸倒損失』ではありません。『貸倒引当金』です。なぜなら、前期末時点 (3 月 31 日 時点) で、決算整理仕訳として

(借) 貸倒引当金繰入 (貸) 貸倒引当金

という仕訳をしていたはずであり、3 月 1 日発生 of 売掛金は、この貸倒引当金の対象となっていたからです。この借方の『貸倒引当金繰入』は費用の勘定科目です。費用の計上は前期末 (3 月 31 日) で済ませているということです。ですので、**当期 (4 月 30 日) の費用にはしません。**

CHAPTER 11 決算整理仕訳 3/3

・有価証券の評価

CHAPTER 6で、売買目的の有価証券は決算に時価評価する旨説明しました。たとえば上場している株式を、株価の値上がりを期待して買った場合の話です。

たとえば、3月1日にA社株式 10株を、売買目的で株価 100円で購入したら(現金で)
(借) 売買目的有価証券 1,000 (貸) 現金 1,000

これは、このA社株式の帳簿上の価値(簿価)が 1,000円ということです。
そのまま保有し続けて3月31日が終了し、決算になったら時価で評価しなおします。たとえば、3月31日のA社株式の終値が 130円になっていたら、
(借) 売買目的有価証券 300
(貸) 有価証券評価益 300

です。売却したわけではありません。保有し続けていて株価が上昇しただけです。それだけなのに収益を計上します。
なぜでしょうか？ 簿記のテキストではあまり触れられていないかもしれませんが、簡単に説明します。

『売買目的有価証券』は、「短期間での時価変動を利用して儲けよう」と思って購入した有価証券のケースを想定していますので、その意思・意図を仕訳に反映させます。売るつもりで保有しているのですから、『たとえ売っていないとしても、売ったらどうなるか』を仕訳させるものです。株式を購入したときに「売買目的である」とした以上は、こうします。たとえば上記例では、『もし期末時点で売ったとしたら、儲けが 300円のはずである。』という考えを仕訳として反映させています。

売買目的でないのであれば、そもそも『売買目的有価証券』というカテゴリー(勘定科目)には分類されずに、他の名称の勘定科目を用いて、収益計上もしません。

このように時価評価するのは、売買目的の有価証券など、ごく限られた勘定科目のみです。たとえば、消耗品も、固定資産も、決算になっても時価評価をしませんでした。売買目的ではなく、将来消費する目的、あるいは使用し続ける目的で購入したものです。ですので、時価評価の対象とはなりません。

・商品売上原価の算定(三分法の決算整理仕訳)

実は三分法の決算整理仕訳、結論は非常に簡単です。以下の2つの仕訳をつくるだけです。しかも用いる金額も単純です。

(借)仕入 (貸)繰越商品
(借)繰越商品(貸)仕入

一つ目の仕訳の金額は前期末の在庫金額で、
二つ目の仕訳の金額は当期末の在庫金額です。

たとえば、前期末の商品有高が 200 円、当期末の商品有高が 300 円だったとすると
(借)仕入 200 (貸)繰越商品 200
(借)繰越商品 300 (貸)仕入 300
です。

三分法の決算整理仕訳は以上です。ヒジョーに簡単です。検定試験に受かるためだけでいいのでしたら、この2つの仕訳を覚えるだけでいいのです。

しかし、やはり理屈を知ることが大切です。この二つの仕訳の意味は为什么呢？
その理屈を理解するのは、初学者には難しいと思います。初学者の方にわかるように説明するのもナカナカ難しいのです。。。
できる限りやさしく説明しますが、まずは『習うより慣れろ』かもしれません。この決算整理仕訳に関しては、結論(二つの仕訳)だけを覚えるのも策です。

簿記3級の決算の練習問題を何回か解いて、(理屈はわからなくても)この仕訳に慣れたら、解説文を読んでその理屈を追いかけてみると理解できるようになると思います。
実際、初学者何人にも丁寧に教えてきましたが、結論を覚えてもらって何度か決算の練習問題を解いてからでないとナカナカ理解ができません。
私自身もそうでした(^^ゞ
では、これら2つの仕訳を行う理由を説明します。

三分法の特徴を覚えていますでしょうか？
たとえば 100 円の商品を購入したときは
(借)仕入 100 (貸)買掛金 100

それを 120 円で売ったときは
(借)売掛金 120 (貸)売上 120
と仕訳します。

このとおり、(分記法と異なり)三分法では、売った時に「売った商品の仕入原価」を仕訳で表現しないので「商品を買ったことによって得られた儲け」もわからないという特徴があります。上記の例は簡単な例なので、売った商品の仕入値は 100 円だったとすぐわかりますが、それを売ったときには仕入値に関しては何の仕訳もしていませんし、まして扱う商品個数や回数が多くなったらわからなくなります。

三分法では売上高はわかるので(上記例でいえば、売上高 120 円が仕訳されているため)売れた商品の原価(売上原価といいます)が知りたいわけです。それがわかれば商品売買から得た儲け(売上総利益といいます)もわかります。

$$\text{売上高} - \text{売上原価} = \text{売上総利益}$$

そこで、三分法を採用している場合には、売れた商品の仕入値(売上原価)を算定するための決算整理仕訳が必要になります。

数値を用いて説明した方がわかりやすいので、簡単な数値例で説明します。
STEP 式で簡単な例から順番に説明します。

もう一度言いますが、売上原価の金額（売れた商品分の仕入値）を知りたいわけですから。それさえわかれば、売上総利益もわかります。

STEP1

1 個 100 円の商品を 5 個仕入れた。5 個とも 120 円で販売した。売上原価はいくらでしょうか？
⇒ $100 \text{ 円} \times \text{売れた数 } 5 \text{ 個} = 500 \text{ 円}$ です。（よって在庫なしです。）

STEP2

1 個 100 円の商品を 5 個仕入れた。それを 120 円で 4 個売って、1 個残った。売上原価はいくらでしょうか？

⇒ $100 \text{ 円} \times \text{売れた数 } 4 \text{ 個} = 400 \text{ 円}$ です。（在庫は 100 円です。）

これを違う見方をすると、
 $(100 \text{ 円} \times 5) - (100 \text{ 円} \times 1) = 400 \text{ 円}$ です。これを言葉で言えば
（仕入れた商品全部の原価）－（売れ残った商品の原価）です。

おわかりになりますでしょうか？

今後はこの方法で計算をすることになります。

STEP3

仕入値 1 個 100 円の商品が 2 個手元にある。さらに 1 個 100 円の商品を 5 個仕入れたので手元には商品は 7 個になった。そのうち 4 個を 120 円で売って、3 個残った。売上原価はいくらでしょうか？

⇒ $(100 \text{ 円} \times 2) + (100 \text{ 円} \times 5) - (100 \text{ 円} \times 3) = 400 \text{ 円}$ です。（在庫は 300 円です。）これを言葉で言えば

（最初にあった商品の原価）＋（仕入れた商品全部の原価）－（売れ残った商品の原価）です。なお、売れた商品は 4 個で、仕入値もそれぞれ 100 円ですので、STEP2 の売上原価と同額です。あくまでも「売れた分の商品」の原価ですので。

もう一度書きます。売上原価は
（最初にあった商品の原価）
＋（仕入れた商品全部の原価）
－（売れ残った商品の原価）
で算定できます。

一応、もう一度違う方法で説明します。

以下の説明ではどうでしょうか？

（最初にあった商品）＋（仕入れた商品）－（売れた商品）＝（在庫）

（２個＋５個－４個＝３個）

この式で、“売れた商品”を右辺に移動させて、さらに右辺の“在庫”を左辺に移動させると

（最初にあった商品）＋（仕入れた商品）－（在庫）＝（売れた商品）

（２個＋５個－３個＝４個）

になります。わかりますでしょうか？

つまり、売上原価は
（最初にあった商品の原価）
＋（仕入れた商品全部の原価）
－（売れ残った商品の原価）
で算定できます。

いかがでしょうか？
説明を続けます。この計算式を仕訳で表現できれば、三分法を採用していても売上原価を算定することができます。

STEP3の数値例を用いて、決算整理仕訳を以下に書きます；
1個 100 円の商品が 2 個手元にある。さらに 1 個 100 円の商品を 5 個仕入れたので手元には商品は 7 個になった。そのうち 4 個を 120 円で売って、3 個残った。必要な決算整理仕訳を作りなさい。

答えは、以下のAとB 2 つの仕訳です。
A: (借) 仕入 200 (貸) 繰越商品 200
B: (借) 繰越商品 300 (貸) 仕入 300
です。

この仕訳をすると売上原価 400 円を自動的に算定できるのです。なぜでしょう？？これを説明するために、計算原理をクドクド説明してきました。
（『繰越商品』という勘定科目の説明は後述しますので、とりあえずは『仕入』のみに注目してください。）

『仕入』は、増加・発生したときは借方に仕訳される勘定科目です。ということは、まずAの仕訳は、『仕入』勘定を 200 増やしたことになり、Bの仕訳は『仕入』勘定を 300 減少させたことになります。

ここで復習ですが、期中に 5 個仕入れたときには
C: (借) 仕入 500 (貸) 買掛金 500
という仕訳を起こしたはずですが（決算時点ではすでに仕訳されているはずですが）。これは『仕入』勘定を 500 増やしたことを意味しています。
これらA～Cの仕訳の『仕入』のみに注目すると、『仕入』勘定は正味で
 $200(A) + 500(C) - 300(B) = 400$ 円の残高です。この金額は売上原価です。
つまり、決算整理仕訳としてAとBの仕訳をすれば、結果として、『仕入』勘定の残高が売上原価の金額と等しくなります。

仕入

当期商品 仕入高 500 (すでに期中に 仕訳してある)	決算整理仕訳 300
決算整理仕訳 200	∴ 売上原価 400 (売れた分 の原価)

STEP3 で書いたとおり

$(100 \text{ 円} \times 2) + (100 \text{ 円} \times 5) - (100 \text{ 円} \times 3) = 400 \text{ 円}$

(最初にあった商品の原価) + (仕入れた商品全部の原価) - (売れ残った商品の原価) のことです。

よって『なんでこの2つの仕訳が必要なの??』という質問への返答は、
「三分法では決算で売上原価を算定する必要があるから」そして
「売上原価は仕入勘定の残高で算定できるから」そして
「その金額は、2つの仕訳をすることによって自動的に算定できるから」
です。

この仕訳には暗記の仕方があります。
2つ仕訳をあわせて「しいくりしい」と覚えます。
(「しいれ くりしょう くりしょう しいれ」とも呼ばれます。)

(借)仕入 (貸)繰越商品
(借)繰越商品 (貸)仕入

最初の「しいくり」の金額は、前期末(=当期首)時点の在庫の数値、
つぎの「くりしい」の金額は、当期末時点の在庫の数値
を用います。これ覚えてください！
この2つの仕訳をすることが、結果として売上原価を算定することになります。

では次は『繰越商品』について説明します。
『繰越商品』という勘定科目は、決算のときにしか出てきません。

(3級では)さきほどの2つの仕訳でしか出てきません。
この勘定科目の最終的な残高が期末商品残高であり、貸借対照表上にも記載される金額です。その理屈を説明します。

さきほど『しいくり くりしい』という仕訳で出てきましたが、
最初の仕訳『しいくり』は
(借)仕入(貸)繰越商品
です。用いられる金額は前期末商品有高(＝当期首商品有高)です。
この仕訳は、1年目の決算では当然0円です(ですので1年目はこの仕訳はありません)。そして、2
つ目の仕訳『くりしい』は、期末商品有高が 300 円だったとしたら
(借)繰越商品 300 (貸)仕入 300
です。よって、これが1年目の決算での決算整理仕訳です。

2年目になりました。三分法では、期中には『繰越商品』という勘定科目は使用されません。
そのまま2年目の決算になりました。2年目の期末商品有高が 250 だったとしたら、決算整理仕
訳は
(借)仕入 300 (貸)繰越商品 300
(借)繰越商品 250 (貸)仕入 250
の2つです。

まず一つ目の仕訳によって、期首(＝前期末)以降一切仕訳されていない(よって残高は 300 のま
まの)『繰越商品』勘定はゼロクリアされます。
そして二つ目の仕訳で、『繰越商品』を 250 に計上しなおしました。結果、『繰越商品』勘定の残
高＝期末在庫の数値、となりました。

繰越商品	
前期末から繰越 (＝期首有高) 300	決算整理仕訳 300
決算整理仕訳 250	∴ 期末有高 250

よって、『繰越商品』勘定の残高をそのまま貸借対照表の『商品』の金額として記載します。

三分法では、この2つの仕訳を決算の都度繰り返すだけです。
以上から、『しいくりくりしい』と仕訳することによって、売上原価の算定もできましたし、期末商品在庫を仕訳に反映することもできました。これら2つの仕訳、覚えてください。

説明が上手ではなかったかもしれませんが、なんとなくおわかりいただけましたでしょうか？まずは仕訳だけでも覚えてください。

以上で決算整理仕訳の説明は終了です。これらすべてできるようになってください。

ここでもう一度決算の作業の流れを以下に書きます。決算整理仕訳の位置づけを再確認してください。②です。

- ① 4月1日～3月31日までの期中仕訳を集計して、いったん試算表を作成します。なお、この試算表は『決算整理前試算表』(前 T/B)と呼ばれます。
- ② 決算整理仕訳をつくります。
- ③ 「前 T/B」に決算整理仕訳を反映させて、最終的な試算表を作成します。この試算表は『決算整理後試算表(後 T/B)』と呼ばれます。このとき最終的な利益を算定します。
- ④ 「後 T/B」から貸借対照表と損益計算書を作成します。

簿記検定試験では、たとえば①はすでに完成してあって、受験者には②以降の作業をやってもらったりします。

決算整理仕訳の次は、後 T/B を作ります。そして B/S と P/L を作ります。これは単なる手作業ですので、検定試験の問題集を解いて慣れてください。重要なのは決算整理仕訳ができることです。

これで決算は終わりです。

ここまでで簿記3級の期中仕訳も決算整理仕訳も一通り学習が終わりました。

Q1;

3 月 1 日にA社株式 10 株を、売買目的で株価 100 円で購入した。そのまま保有し続けて 3 月 31 日（期末日）が終了し、決算になった。3 月 31 日のA社株式の終値が 130 円になっていた。必要な決算整理仕訳は？

(借) 壳買目的有価証券 300

(貸) 有価証券評価益 300

Q2;

前期末の商品有高が 200 円、当期末の商品有高が 300 円だった。必要な決算整理仕訳は？

(借) 仕入 200 (貸) 繰越商品 200
(借) 繰越商品 300 (貸) 仕入 300
『しいくりくりしい』です。

CHAPTER 12 伝票

私は大学生時代、『今の時代、伝票なんて実務で使ってない。』と聞いたことがありました。実際に経理部に入ってみて、それがまったくのウソであることがわかりました。
みなさんはここまで仕訳の勉強をしてきました。簿記の勉強を続けるのであれば、これからも仕訳の勉強をしていきます。

では『仕訳』は、どのように『帳簿』に反映されるのでしょうか？
というか、その前に、仕訳が反映される“帳簿”は紙でしょうか？

私の知っている限り、ほとんどの企業では、帳簿は電子データです（もちろんそれをプリンターから出力すれば紙ですが）。会計ソフトなり会計システム内のデータとして存在します。パソコンの画面上で見ることができます。

では、その『電子的な状態の帳簿』にはどのように仕訳を反映させるのでしょうか？通常、紙ベースの伝票もしくは表計算ソフトで作成した伝票に仕訳を記載（記入）して、それを会計ソフト（会計システム）に反映させます。手入力する場合もあれば、伝送処理で反映させる場合もありますが、いずれにしても、紙ベースの伝票であろうと、電子的に作られた伝票であろうと、『伝票』に借方と貸方を記入（入力）して仕訳を作成します。

『伝票』は使われています。当たり前のように使われています。
とそれは検定試験ではあまり関係ないのでいいとして、ではどんな伝票があるのかですが、実務では会社によっては、何十種類もの伝票があります。入金伝票、買掛金伝票、手数料伝票などなど、「こういうときはこの伝票、ああいうときはあの伝票」と社内ルールで決まっていたりします。

簿記検定試験で出てくるのは『入金伝票、出金伝票、振替伝票』の3種類です。
そこで、なぜ伝票が3種類もあるのか、です。それを理解すると、簿記3級の『伝票』のマスターは簡単です。

簿記のテキストを読むと、たとえば、
“企業の取引を、入金取引、出金取引、その他の取引の3つに分類し、それぞれの取引について、入金伝票、出金伝票、振替伝票の3種類を使う”というようなことが説明されていたりします。それは確かにそうで、、、そう機械的に覚えることもできますが、、、これでは初学者の方々には理解（納得）が難しいように思われます。

私の理解では、こう考えます。
『伝票はそもそも1種類でいいのです。振替伝票のみでいいのです。すべての取引を、この振替伝票で仕訳します。実際、伝票が1種類しかない企業も多くあります（その場合、一般会計伝票とも呼ばれます）。
ただ、現金の入金、現金の出金が毎日何十件もあると、イチイチ借方現金・貸方現金と書いて仕訳するのが面倒になってきます。現金の入金・出金については、それぞれ『借方 現金』『貸方 現金』と予め印刷してある伝票を使ったほうが手間が省けることになります。そこで、借方が現金と決まっている入金伝票と、貸方が現金と決まっている出金伝票も使い、結果3種類の伝票を使い分けることになった。』

つまり『まずは1種類のみだった。必要に応じて伝票種類が増えた。』
こう考える方が自然ですし実際そうだったんだと容易に想像ができます。

『使う伝票は振替伝票が基本。ただし入金（借方現金）は入金伝票、出金（貸方現金）は出金伝票を使う。』と考えるわけです。

よって、たとえば

（借）現金 500 （貸）受取利息 500

という仕訳をしたいときには、入金伝票を使います。

しかも、実際には貸方しか記入しません。

なぜなら、借方にはすでに『（借）現金』と印字されているからです。

（もしくは、印字されていなくても、“入金伝票”なので、借方が「現金」であることが前提になっています。）

つまり、入金伝票を使った場合は、借方の勘定科目は、絶対に現金です。

同様に、出金伝票を使った場合は、貸方の勘定科目は、絶対に現金です。

入金伝票に「受取利息」と書かれていたら、たえそこに『現金』と書かれていなくとも、

（借）現金 （貸）受取利息

という意味です。

この考え方さえ身につけていれば、3級の伝票問題は簡単です！

【おまけ】

ちょっとしたことなのですが。。。

私はこのチャプターの名称を『伝票』としました。上記の内容は、簿記のテキストでは通常『伝票会計』とか『伝票式会計』と呼ばれています。しかし私は『伝票』としました。

それは、『伝票（式）会計』というタイトルをきくと、「それって今まで覚えてきた簿記と違うの??」という「なんだか特別な簿記会計を習う」ような心構えになってしまいかねないからです。

上記で説明しましたように、特別なことなんて何ともありません。実務でもごくごく当然に使われている**『伝票』の種類を説明しただけです**。簿記検定合格のためには若干のテクニックというか慣れが必要かもしれませんが、なんてことはありません。伝票の種類を勉強するだけなんです。

本チャプターで説明した理屈を理解していれば、『伝票会計』はどうってことはありません。むしろ得点源です！

Q1;
三伝票制を採用している会社で用いられる伝票の名称3つは？

入金伝票、出金伝票、振替伝票

Q2;
(借) 現金 500(貸) 受取利息 500 という仕訳をしたいときに使う伝票は？

入金伝票

Q3;

小切手を振り出して電話代を支払ったときに使用する伝票は？

振替伝票。

仕訳は

(借)通信費 (貸)当座預金

です。現金は動いてません。

おわりに

私の経験上ですが、大学で使用する教科書や、専門学校で使用するテキストは、初級～上級のテキストは非常によくできているのですが、初級の前の段階である『入門レベル』のものを読んでいても、解説がどうも初学者向けではない、、、ような気がしています。

初学者の方々に簿記を教えていると、みなさんが感じる疑問点やとっつきづらい点は、だいたい共通しています。

そこで『入門レベル』の本を読む前に読むものをつくりたい、と思いました。

しかも、実務でのハナシの盛り込みが少ない！やはり実務経験者が本を書かないといけない、と思うようになりました。巷の簿記の本には、不思議なくらい経理実務のことが書かれていないのです。（経理実務の話は、やはり経理実務経験者にしか書けないことが多いのかもしれませんが。監査やコンサルではなく、企業の経理部での実務経験です。）

また、私は幸運にも、簿記会計の知識がゼロの方々を対象に簿記を教える機会に比較的多く恵まれました。

大学院生時代は、大学1年生を対象とした会計学の講義（50名程度のクラス。まさに全員初学者！）を2年間担当させていただきました。

また社会人になってからは、経理コンサルタントをしていたときに、お客様から経理部以外の方への簿記のレクチャー依頼を受けたり、プライベートではまったくの簿記初学者二人に日商簿記検定3級の内容を個別指導で教えたりしてきました（二人とも1～2ヶ月という短期間で一発合格させることができました。）

そのときに受けた質問などをおりまぜて、この本を作成しましたので、初学者の方がまずおさえなくてはならないこと、なんだかよくわからないこと、そして覚えるべき順番に注意して書きました。

本書では、日商簿記3級の内容のうち、あまり重要でないマイナーな（と思われる）論点を省いています。まずは重要なトピックの基本と全体像を把握してもらうのが本書の目的です。

読み終わると、簿記の全体像がだいたいわかると思います。そしたら、他の簿記検定用テキストを読んで、問題集を解いて、簿記ワールドに浸かってってください！

簿記を勉強すると、小切手や手形などの仕組みや商品の仕入れ・販売も同時に理解することができますので、経営の3要素『ヒト、モノ、カネ』のうちモノとカネが見えてきます！

簿記・会計は、会計専攻の学生や経理担当者のみが知っていればいいというものではありません。必要とされる知識の深さは人それぞれですが、決算書を見る機会のある方全員にとって必須の知識です。また、新聞を読んだり、テレビでニュースを見るときに、簿記・会計の知識がないと理解できないこともたくさんあります。「●●自動車が今年度の決算を発表し、連結経常利益が〇〇億円、連結営業利益は△△億円になりました」なんていう類のニュースは、簿記・会計の知識がないと理解できませんね。簿記・会計はビジネスを理解するための必須アイテムだと思います。

ですが、これから簿記ワールドにどっぷり浸かろうとしている方に言うのもナンですが、、、あくまでも個人的な感想ですが、、、

簿記は入門～中級くらいまでは、まったくもってつまらない学問です。ひたすら電卓たたいて、仕訳して、帳簿に記入して、表を作って、儲けを数えて。。。。とくに帳簿への記入や帳簿を締めたりする

作業がどうも、、、、。

しかし、それを過ぎて上級くらいに足を踏み入れると一変します。『簿記』から『会計学』の領域にも入りますし、製品原価を算出する手法を学んだり、会計基準を勉強したり、世間の経済ニュースがきちんとわかるようになったり、諸外国と日本の制度の違いが見えてきたり、と段々面白くなっていきます。ぜひそこまでチャレンジしてください！

この本は、とくに営利目的ではありませんので、値段も格安に設定してあります。
また、電車内やカフェ等で手軽に読めるように、電卓が必要ない読み物にしてあります。今後の簿記の勉強は、電卓をひたすらたたくことになりますよ（笑）

なお、ここに出てくる単語や説明は、厳密な意味では正確ではない箇所もあるかもしれませんが、入門者の方々のご理解のために、私なりに噛み砕いたものとご了承ください。
また、最新の会計基準等には注意を払って書いていますが、本書の内容は2015年3月時点の私の個人的な経験・知識をもとに書かせていただいております。本書によって損害を被ったとしても、責任を負いかねます。ご了承ください。

また、私は『会社法bot的ふくしままさゆき』という名で、会社法と簿記会計のTwitterをやってますので覗いてみてください。

おしまい。
ふくしままさゆき